

モスクワ見たまま

杉山金夫



第六回世界青年学生平和友好祭に参加して



入場式のパレード

モスクワ見たまま

杉山金夫

レーニン賞にかがやく
モスクワ友好祭の愛唱歌

もし世界の青年が

イエ・ドルマトフスキー 詩
ヴェ・ソロビヨフ＝セドイ 曲
こみや・たみえ 訳

1. もし世界の青年が
手と手をにぎりあい
未来をかたる日が来たら
そこに限りなき友情

Слова Е. Долматовского
Музыка В. Соловьёва-Сезога

ЕСЛИ БЫ ПАРНИ ВСЕЙ ЗЕМЛИ

—くりかえし—

- 青年 青年 心ひとつに
力をあわせすすめ
いとしきものの
ほほえみのため } 二回
たたかおう

Moderato

Es - li by pa - rni
もし世界の
всем на - м. Все - сте вы бра - тья сест -
我 等 全 人 類 互 に 弟 妹
за - ня - тья. Будут бы - тие сс - лави на - ны та -
我 等 全 人 類 互 に 弟 妹 互 に 弟 妹
и - сти. И - сти же - ства на - сть ру -
我 等 全 人 類 互 に 弟 妹 互 に 弟 妹
Син Пар - ни, пар - ни,
我 等 全 人 類 互 に 弟 妹
и - сти на - сть же - ства на - сть же - ства
我 等 全 人 類 互 に 弟 妹 互 に 弟 妹
За - ня - тья на - сть же - ства на - сть же - ства
我 等 全 人 類 互 に 弟 妹 互 に 弟 妹
встреч
我 等 全 人 類 互 に 弟 妹
встреч
我 等 全 人 類 互 に 弟 妹

2. もし世界の青年が
声そろえ歌えば
海こえ山こえとどろく
そのうた平和のうた
3. もし世界の青年が
その誓い果して
平和の世界きずいたら
そこに生きるよろこび

of the world are yearning for.
 In November 1957 the Soviet people celebrated the fortieth anniversary of the Great October Socialist Revolution which ushered in a new era in the history of mankind.
 The new Soviet socialist system had opened boundless vistas for a boundless upsurge of creative activity of the millions.
 Within an unprecedentedly brief historical period the Soviet Union has made a giant stride from backwardness to progress and has become a mighty industrial power.

enrichment in the USSR greatly contributes to the Soviet people's interest in foreign literature which is widely translated in the Soviet Union, particularly the works of classic and contemporary progressive writers. Our people are keenly interested in the technological and engineering progress of the foremost capitalist countries, in the economic development of all countries. That is why the development of international trade and removal of barriers to cultural cooperation find such receptive soil in our country. No "iron curtain" erected by Big Business with the aim of fencing off the Soviet Union from the countries of the capitalist West, will be able to hold back the march of history. Living realities themselves will pave the way to mutual understanding and cooperation which all the nations

目次
表紙の写真

フェスティバル開会式に出演したソビエト
 体育大学学生のピラミッド・ビルディング

シベリヤを飛びウラルを越える 一
 理不尽な外務省の旅券制限 一
 ナホトカのみくちャの歓迎 二
 スポーツ代表団の使命 三
 モスクワ赤げつと 五
 続々建てられるアパート群 五
 日本語のうまいモスクワの大学生 六
 人のよいロシア人とその食事 七
 レニンとスターリンをみて 八
 作家同盟で女流詩人と会談 九
 パンのみならずと月おくれの「コムニスト」 一〇
 地上最大の若者の祭典 一〇
 ハンブルグの青年と半日語り合って 二
 ヒロシマの悲劇をくりかえすな 一八
 五十万の大集会 一八

公務員労働者の集会 三三
 日本官公労を代表して登壇 三三
 モスクワ市長をたずねて 三四
 公務員労働者集会での杉山報告 三五
 ウォッカの飲み屋は見当らない 三三
 原子炉もある農業博覧会 三七
 物価は高いが暮しは楽だ 三三
 百貨店 風景 三〇
 ソ連の産業と日ソ貿易 二四
 ゆきとどいた社会保障で家計は黒字 二四
 再び作家同盟を訪ねて 二七
 人工衛星を生むすぐれた科学教育 三二
 すし詰めより二部教育 三三
 ソホーズを訪ねたハンストの英雄 三三
 クレムリンとケセラセラ 三七
 車・人・有料便所 三六
 革命の砲口 レニングラード 三九
 ミールに全力を挙げるソヴェト 四〇
 あ 四三
 と 四三
 が 四三
 き 四三



レーニン・スタチアムの入場式（日章旗を持つのが筆者）

シベリヤを飛びウラルを越える

理不尽な外務省の 旅券制限

東京での二週間にわたる旅券給の交渉を出発日時のぎりぎりまでつづけたが、ついに五〇〇名の渡航申請は僅か一五五名という大巾に削減された人員で出発することに決り、七月十八日朝、新潟港から出迎えに来たソビエト船アレキサンドル・モジヤイスキー号（九、八〇〇屯）に乗って、日本をはなれた。昨日まで一緒に外務省への陳情や、抗議の座りこみに、また都内のデモに走りまわりながら、われわれに榮与あるモスクワへの席を譲ってくれた各県の仲間達、俺の分も……と手を握り、地元民と一緒に歌をうたうたって船出を祝ってくれた光景は、うれしくもあり、せつなくもあり、いつまでも脳裏にきざまれてならなかつた。

外務省がわれわれに旅券発給を拒否する理由はこの半月の折衝の過程において一度も明らかにならなかった。旅券法第一三条によれば、外務大臣は「著るしく且つ直接に日本国の利益または公安を害する行為を行うおそれがある」と認めるに足る相当の理由がある者のほかは、旅券発給を申請する者に対して、これを拒否することは許されないはずである。世界青年学生平和友好祭は、一九四五年エルベの河畔に会した連合軍の将兵たちの「今度会うときは戦場でなく、平和と友情の集いで」という誓いのもとに回を重ねてきた平和の祭典である。われわれはこの祭典に「原水爆実験禁止」という日本の民族的要求をひつさげて参加するのであるから「著るしく且つ直接に日本国の利益または公安を害する行為を行うおそれ」などと凡そ結びつくものではない。よしその開催国が政府のお気にめさない国であったとしても、既にソヴェト・ロシアとわが国との間には正常な国交を回復しているのであるから問題ではない。われ

われははげしかった東京での旅券斗争を通じて、違法を承知のうえで外務省や自治庁を督促して、われわれの訪ソを極力阻もうとした岸政府のその反動ぶりをいやというほど知らされたのである。

船上で新しい団編成を行ったわれわれは



ナホトカでの歓迎陣

モジヤイスキー号の船員等との交歓会など行いながら、平穩な日本海の三十五時間の航路を終えて、七月十九日午後四時（日本時間）アカハタを掲げた出迎船に導かれてナホトカ港に到着した。

ナホトカのもみくちゃの歓迎

ブラス・バンドの奏楽の中を船のタラップから埠頭に第一歩をおろすや、三千名ほどの歓迎の民衆がドットばかりにわれわれに押しよせてきた。握手と花束でもみくちゃにされそうだった。花で飾られた駅前の歓迎集会所には高い演台が設けられ、世界平和のために闘う日本青年に熱烈な平和と友情のあいさつを贈る」と日本字のスローガンが掲げられ、この市長や、ユムソモール（青年共産同盟）第一書記、体育協会会長などがあいついで祝辞を贈ってくれた。

集会に押しよせた市民は、作業衣の者、軍服の者などその服装は様々で、概して質素であるが娘さんたちはとくにこの日のために装いをこらしたのか、イヤリングやネックレスをつけている者も多く、旧式なハンドバックなどを手にしていた。中には首のネックレスを無造作にはずしてわが婦人代表にアレンセン

トする娘さんもあり、子どもたちは何日もかかってこしらえたであろう模型の飛行機やヨットなどの手工品をわれわれの腕にたくするなど、素朴で善良な歓迎ぶりであった。いっしか私の胸にも人々のつけてくれたバッジがピカピカで私もまた東京から持参した富士山に平和の鳩をあしらった記念バッジを彼らの胸につけてやった。集会の終了後、警察官によって整理された人ガキの中を、「しあわせの歌」をうたい「スパーシーバ」（有難とう）を連呼しながらナホトカ駅から特別仕立の急行寝台車の客となった。

ナホトカは人口四万の街、商業都市としてつい数年前完成したばかりで、それまでは寒村の一漁港にすぎなかったのであるが、いまでは一万トン級船舶が何隻も繋留される建設シベリヤの表支関として樺太・朝鮮との交流がはげしいようである。かつてこの港湾の建設工事に多くの日本人捕虜が従事したことは周知の通りである。

ハバロフスクに向う途中、夜半にウオロシロフなど二、三の駅に停車したが、どこの駅でも周辺のホルホズからかけつけてきてくれた農民たちが、アコーデオンやバイヤンをひいて「カチューシャ」や「世界民主青年の

歌」などうたつて歓迎してくれた。十五分間の停車時間もそのためにいつも遅れ勝ちで、駅員や巡査が熱狂する歓迎の人々の中から、われわれを救い出すようにして列車に押し上げてくれる。

ハバロフスクから

特別機で

二十一日、日本時間で午後三時、列車はハバロフスクに到着した。車輻から真先に下車した私は十五、六才の少女と握手し、そのまま肩を抱かれてホホにキッスをいただいた。日本代表団で最初のキッスである。

さて私はここで列車の本団とは別に、スポーツ関係者と同様にハバロフスク飛行場から特別機で航路モスクワへ先発することになった。旅券斗争のため出発が遅れてしまったわれわれ日本代表団が、たとえ十一名でもフェスティバル（友好祭）の入場式に間に合わすべくフェスティバルの国際準備会とソビエト政府の配慮から双発機一台がまわされたのだ。先発隊は原爆被災者一名に芸能コンクールに出場する宮城会の邦楽メンバー四名のほか、労働、農村、学生、文化の各代表と通訳、事務局とであり私はこの先発隊の事務局担当者

として機上の人となった。

ハバロフスクからイルクーツク、そこからモスクワへとわれわれ十一名の先発隊は着陸する各飛行場ごとに多くの人々の歓迎に応えながら進んでゆく。スウェルドロフスクなどではその陸軍楽隊が出て歓迎演奏をしてくれた。彼らのブラスバンドはほとんど金管楽器でしめられ、クラリネットなどの木管楽器は三十二人のバンドで、僅かに三、四本とあった編成であるがポリリウムのきいたすばらしい演奏であった。われわれの方でも彼等に「東京モスクワ」を斉唱して応えたり、夜半に着陸したオムスクでは飛行機上から都山流の北原君の尺八伴奏で私が「荒城の月」を独唱した。

私は飛行機の上でナホトカ以来のこのシベリヤの人々の質朴な歓迎ぶりをどう受取るべきかを考えた。正直なところナホトカでは面くらった。フェスティバルは民族国境を越えた世界青年の平和の祭典である。この祭典に参加するわれわれはナオトカ港を迎えた最初の国際親善使節団であり、しかもこの代表団は無理解な政府によって旅券の発給を制限され、その出発が危ぶまれていた。しかし半月の斗いを通じてたとえ一五五名に削減はされ

たとはいえ、ついに渡航を勝ち得た「世界青年のために闘う日本青年」の代表団であるからか、あるいは日本人捕虜などとの接触からくる近親感や好奇心からであろうか、まだ結論を出すのは早計だ。なにしろ東西一万余キロの広大なロシアの東の果てに、針先ほどの一点を印したのみであるからだ。

チタの空港待合室で、三番機に乗っていた日本スポーツ代表団の中に静岡県富士宮市のハイ・ジャンプの石川選手がおり、私は石川君にコンデイションをたづねたら、「もうそろそろ年ですわね」と笑っていた。彼は練習記録一メートル九八をもち、体育協会の東団長は彼に二メートルをオーバーすることを期待していた。ハイジャンプの世界記録はソビエト選手による二メートル一六とのことである。私はこの無口な郷土の青年選手に健闘を祈った。

スポーツ代表団の使命

日本スポーツ代表団の今回のモスクワ行きは、われわれの第六回世界青年学生平和友好祭と時を同じくしてモスクワで開かれる第三回世界青年スポーツ友好祭に参加するために

日本体育協会は次期オリンピック大会の中間的国際競技として重要視し、ハイジャンプ、三段跳、体操、バレーボール、レスリング、ホッケーの六種目に、それぞれ日本スポーツ界の中堅選手を選抜してきているのである。なかでも体操はメルボルン大会で個人優勝した小野、田中選手などの一流どころを加え、レスリングとともにその優勝が期待されている。バレーボールは前田監督指揮のもとに日本としては初めての六人制チームで戦うということだ。ホッケーも何十年ぶりの国際舞台への出場だそうで、みなはりきっていた。私は彼等のアレキサンドル・モヂヤイスキー号上でその厳格な練習ぶりには、感心させられた。われわれの旅券斗争のために二日間の出港延期は、モスクワに着いてからの練習に若干さしさわりがあるようだった。

アジアと

ヨーロッパの架け橋

シベリヤの飛行場の多くは、何んの障害もない平原の真中に、簡単なステーションと滑走路をおいた程度のもので、かたわらでんびり牛が草を喰っているといった風景を見る。飛行機は時おり雲の中に入ると、かなり

の上下動をはじめめるが、スチュワーデスはなぜかわれわれに安全ベルトをすることをすずめない。彼女は私に夜半に通過したバイカル湖とこれを起点とするアンガラ河に設けられた水力発電所のことについて説明してくれた。アンガラ河はソ連で最も流れが早く水量は常に変らない。この「豊かなバイカルの」その流れの特色を利用してダムを造り、年間十億キロワット時の電力をこの地方の農業の開発と近代化に向けているという。われわれの飛行機はしばしば一望際限のない線と黒土で塗られた大森林に出会う。地球の上半部を占めるかと思われるようなこの広大なシベリヤの大地は、いまソビエト政府の何回目かの開発計画が進み、かつての原野は開発されてほとんど工場や都市化されているのだ。その昔、重い荷物を背負って徒刑の旅をつづけたカチューシヤの姿はいまはない。

スウェルドロフスクを出発したわれわれの機は、すでにウラル山脈を越えている。このロシアをアジアとヨーロッパに区別するならばわれわれはいま一万余キロを飛んで、いよいよヨーロッパに入るわけである。ウラル山脈は私が想像していたほど高いものではなく、これをもってアジアとヨーロッパを画然と区

別することには無理があるように思われた。クリューチエフスキーは「歴史的にロシアはもろろんアジアではない。しかし地理的には必ずしも全部ヨーロッパであるとはいえない。それは過渡的な国土であり、二つの世界の仲介者である。文化はそれをヨーロッパと不可分に結びつけた。しかし自然は常にそれをアジアに引込むか、もしくはその中にアジアを引込むような特性と影響とをその上に及ぼした」といつているが、ロシアをアジアとヨーロッパとに架けられた橋とみることは当然を得た表現だ。古代ギリシャの地理学者はヨーロッパとアジアの分界線をドン河にもとめアジアの遊牧民たちはテントをもって家畜の群をつれてヴォルガ河を越え、ドン河を渡った場合にもヨーロッパにきたとは感じなかったというが、ましてやわれわれは機上の人、わずかに中継の飛行場で歓迎の人々の服装からヨーロッパのに近づいたことを知るのみである。

モスクワの手前カザンという町に着陸したターミナル大広間には若き日のレーニンが先頭にたち、ツァーリに対するクーデターを指揮する大きな油絵がかかかれている。出迎える青年は時間があるからレーニン大学を見

に行かないかときかんにすすめるので、数名でバスに乗って市内を二巡し、大学を見学することができた。レトニンはミンピルスク、すなわち現在のウリヤノスクスで生れたがストライキでこの大学を放逐され、ペテルスブルグ大学に転学し、その後弁護士になった「戦争と平和」などで有名なトルストイや世界的な数学者、ロバチエフスキーもこの学校に学び、ついこの十日ほど前の政変でソビエト最高会議から除名をうけたモロトフもこの出身だったという。創立一五二年の歴史と伝統を誇るソビエトの名門大学である。

ゴリキーが青年時代に働いていたというこの町は、町そのものが古く、昔のロシアの人々の生活をしのばせるようなギリシヤ正教の寺院や城跡があり、ツオルガ河畔がのぞまれ情緒ある町である。しかし町中の古い木造住居はいま取りこわしが行われており、遠からず新しい煉瓦作りの建物の立ちならぶ町へとその様相は次第に変わっていくことであろう。人民の生活改善への必然からとはいえ、他国の私にもそこになにか古びた街の様相へ一種の郷愁を感じてならなかった。

モスクワ赤げつと

七月二十二日、四時（日本時間で午前十時）ハバロフスクから三十四時間（途中九カ所着陸）の空路をおえてモスクワ中央飛行場に着陸した。日章旗の四すみをもった日本代表団先発隊は滑走路に整列して、フェスティバル国際準備委員やモスクワのコムソモール員NHKや日本新聞社特派員など多数の出迎えをうけた。先発隊の団長樺山君（全農林）が用意されたマイクの前でステータ・メントを發表した。この草案は私が機上で作ったもので同行の上智大学の小沢教授が通訳してくれた。私はこの文中に簡単な旅券争争の経過とそのため本団は遅れて入場式に参加できなないため、十一名で入場式に参加し、併せて八月六日東京での原水爆禁止世界大会に呼応して、このモスクワに参集する世界の青年学生に呼びかけて大集会を準備することを主な任命としていることを明らかにした。

続々建てられるアパート群

われわれはバスで飛行場からモスクワの市街へと向った。チリ一つない平らな舗装道路で時おりコルホーズへ帰る農民のトラックと

すれちがう。だが私はこのモスクワの郊外で驚いたのはいまこの田園地区に続々と建てられている六階建の労働者用の総合建築群である。きけば戦後の住宅不足はこの国でも同じで従来は市内の古い建物を順次整理して、希望によっては一ヶ建ての住宅を作っていたがそれではとても住宅難は解消しないので、こうした郊外に思いきった住宅地区建設の計画をたて、この近代的総合建築物の中に古い建物や住居に苦しむ者を統合する方式をとっているという。建物はブロック建築で大型の機重機を一つおいて婦人労働者などが、ほとんどブロックを積み重ねシャベルでコンクリートを流すといった簡単なもので、大した足場も作られていない。ちょうど左官がコテを使って煉瓦でヘッツイを作る造作に似ているが、社会主義の国に加えて地震の皆無の国ならばこそできる技であろう。

われわれのホテルはモスクワの郊外の農業博覧会の裏手に建てられたオスタンキノという名のホテルで、既に中国の一千名の代表やインド、インドネシヤ、セイロン、などアジア各国の代表団や先発隊が到着していた。周辺に農博附属の花畑があって気持のよいホテルである。ホテルの女中さんはほとんどお婆

さんで、親切がよく気がつく。帝政ロシアの將軍を偲ばせる白ヒゲのお爺さんが電機掃除機をあやつり大工道具をさげて修理にまわる各階の階段には鍵預り所があって交替制で夜中でも婦人の番人がいる。ホテルにいる靴みがきも勿論国営で、一回一ルーブルである。



モスクワ市内にて

われわれはこのホテルの一室を先発隊の事務局にあて、樺山君と日農の降矢君と私の三名で託された仕事を開始したが、困ったことにはこのお二人がお二人とも語学の方は、大体私と大差のないといった連中である。

先発隊にはロシア語通訳として小沢（上智大学教授）さんと英語の吉沢（早大生）君の二人がついてきてくれたが、何しろ公式挨拶からホークのあげおろしにいたるまで、この二人の通訳さんにおっかぶさるので、二人とも体が参ってしまった。他国で言葉の通じないということの悲哀をつくづくと味わった。

日本語の

うまいモスクワの学生

しかし幸にもソビエト側から五名ほどの青年が付いてくれてプログラムの通訳から自動車の連絡まで、まったく頭の下るほどの協力をしてくれた。この青年たちはモスクワ大学や国際関係大学で日本語を学んでいる学生たちである。勿論、彼らの日本語も始めのうちにはなかなか難解で相互に頭を痛めていた。「みなさん、いまからわれわれは食事についての問題を解決しなければなりません。」といったぐあいである。

ソビエト側から出される料理は、小牛や羊肉、鶏などその使う材料は上等であるが、なんとしてもその味がなじみにくい。「ボールシチ」という大きな牛肉の入ったスープは薄あじで油が濃く苦辛い。カツレツはナイフを入れるとチュウツと肉汁と油がとぶ、油漬けの生イワシなどは目をつぶっても口に運べるシロモノではない。

だから日本から持ちこんだ福神漬や海苔の瓶詰がひっぱりだこというわけなので、ははあ、これはおそらくわれわれの食事についての苦労を際して、なにか口に合った献立でも相談して考えようというのだからかと推察すると、これは私の誤りで、単に食事の時間をきめようということであった。

しかしこの青年たちの日本語会話に対する研究心は旺盛でわれわれを相手に生活する数日の中には、おどろくほどぐんぐんと上達していった。もっとも古事記や万葉集を研究したもの、日本の叙情詩に関心を持っているものなど、それぞれ日本文学について一通りの教育をつみ研究をしている人たちで、その点私の下手なロシア語会話はまことにはずかしい思いである。

人のよいロシア人とその食事

昔からロシア人は明日の自分の食うことを考えずに客に対してはできる限りの接待をするというが、私たちにもそうであった。ホテルの附近にある農家の姿をカメラにおさめよ



果汁のコップをおもむるモスクワ娘

うと、あちこち写してまわっていたらその家のおかみさんが出てきて、家にはいってお茶を飲んでゆけという、好意にあまえて訪問すると今度は食事の用意をしようとして私をはなさない。いささか迷惑気味になることもある。

食事は朝、昼、三時、夜の四回(もっとも三時はお茶が主)で風食がディナーになっていて一番のごちそうである。食事の時間を非常にかけて夜食など十時か十一時になることが多い。ロシアでは一般に水が悪いのでミネラルや果汁を常用し、町にも公園にも決まって水売りが出ていて炭酸ガスのポンベをつけた引車をひいたお婆さんが一杯四十カペーで果汁を売っている。人通りのはげしい街角で若い娘たちがコップをおおっている姿は旅の私たちには変わった姿にうけとれた。空気の乾燥しているせいか良く水を飲む国民である。

岡田嘉子さんの来訪

七月二十四日、われわれのホテルに岡田嘉子さんが訪ねて来られた。今から二十数年前新劇俳優杉本良吉氏と樺太国境を越えてソ連入りをした事件については年輩の人なら誰もが良く知っているところであろう。もう五十

をとうに過ぎたであろうが、小肥りではあるが若々しく、ありし日の美貌をしのぼせる容姿である。戦争中はモスクワ放送局に勤務し対日放送に従事し現在はモスクワのルナチュルスキー演劇大学の四年生として演出家を目指しているかたわら同じ映画の俳優であった夫君の滝口新太郎氏とともにモスクワ放送局の仕事もしている。

五十を過ぎてなお芸術的良心を燃やして勉強する彼女は、大学で演出の教え方が非常に良いことを強調していた。日本代表団が近日中に百五十余名も到着すること、そして二週間もモスクワに滞在することを非常に喜んでいたので。特にこの中に邦舞や邦楽の一行が加っていることに「日本という国がどんなに美しい文化の伝統をもっている国か良く知らせることが出来る」と非常にうれしそうであった。なにしろ琴や尺八が一万キロの空を飛んできたのである。モスクワには四十年ほど前に琴の米川親敏、尺八の中尾都山という人々が訪れたのが最初で最後であった。また市川左團次一行がやってきたとき以来、モスクワに留邦人百名が百名、本衣装の舞台は見えないのだ。

入場式は近づき、各国代表団は毎日ぞくぞ

くモスクワに到着する。街はまったく世界民

族の博覧会のようなものである。本団から国際準備委員の土方与平君が飛行機でわれわれに追行してきてくれ、また北京からは中村甕右エ門氏らとともに借入した産別の小倉金吾君がやってきたので停滞していた先発隊の事務も漸



ホテルに訪ねて来てくれたモスクワ放送局
日本課の人々

(右から三人目が岡田嘉子さん)

くスムーズに運ぶようになった。

クレムリン宮殿参観

ある日多忙な事務局の仕事から抜け出して一人でクレムリン宮殿を訪ねてみた。バスをおりてこの方向とおぼしき方へ足を運んでいたらはげしい通行人の中から「アナタハ日本人デスネ」と呼びかけられた。私と同年輩の身長の高い青年、私のぶらさけていたシヨルダーバッグに貼りつけてあった日の丸が目についたからであろう。ただどしどし日本語だ

が彼は数年前モスクワの東洋大学(現在は国際関係大学に発展的解消した)で日本語を習い、いまモスクワ音楽学校のチェロの講師をしているという。さっそく彼は私のクレムリンへの案内人となってくれた。彼に日本の歌曲を知っているかとたずねたら「別れのブルース」を口づさんでみせた。

「クレムリン」とは城塞の意味で、タターの来襲を防ぐために千八百四十九年に造られたもの、宮殿は周囲二千三百メートルにおよび中世以来の赤煉瓦の城壁に囲まれ、その城壁の各所には革命後ロマノフ王朝の双頭の鷲を引きずりおろして代りにつけた光塔と赤い星、黄色に光るドームなど帝政ロシアの

おごりのあとを物語るこの宮殿はいまソ連最高会議や閣僚会議に使われ、共産党本部とともにソ連政治の心臓部である。内部は博物館のようにビュートル大帝以来二世紀半にわたる王朝時代の宝物が並べてある。金、銀、ダイヤのちりばめた絢爛たる宝物のなかに明治天皇がニコライ二世に贈られたという象牙細工の鷲が他の出品物を威圧するかのようにはばたく容姿はひときわ注目をひいた。

レーニンとスターリンをみて

クレムリン宮殿の正面の「赤い広場」の中央前には有名なレーニン、スターリン廟がある。地下室のガラス箱のなかに、レーニン、スターリンの遺体が陳列され一般に公開されている。入場無料、見物人は長い行列をつくっている。フェステイバルが近づいたので、とくににぎわうのではなく、平日でも三、四十分は待たなければ参観できないそうだ。せまい廟内はヒンヤリとして暗い。まん中のガラス箱のなかに上半身を出したレーニンとスターリンが眠っている。遺体の胸と顔の部分に照明があてられ、生けるごとく浮きぼりされている。ろう細工だという説もあるが遺体の囲りにいかめしい薙剣の衛兵がいて、立ち

どまっけて中をのぞくことはできない。左側のレーニンには質素な紺の詰襟服、右側のスターリンはピカピカの大小たくさんの勲章がついた元帥服で対照的だ。エンゲルスは「自分の遺体はドーバー海峡に投げてくれ」といったというが、レーニンもまたこの説に組するものではなかったろうか。社会主義の世界観をもつ国の「偶像崇拜」は、はしなくもクレムリン宮殿でソビエトの社会主義の特異性をみる思いであった。

めくら蛇におじす

女流詩人との文学会談

七月二十六日、私はエカチエリナ・シエウエローヴァという女流詩人の訪問をうけた。女史はソビエト作家同盟の会員で、日本詩に深い関心を持ち昨年訪日文化使節として東京に滞在したこともあり、わが先発隊の通訳吉沢君はその際、彼女と行動を共にし、以来文通していた。この日も前夜ポーランドから帰ったばかりのところだが日本代表ならんかつけつけてきてくれたというのだ。女工生活から詩人となり現在はツルードの記者もしているという。

私は女史からソビエト文学についての感想

個々人の人間革命が必要であると、早口で自説を聞かせてくれた。このクラブのレストラオンに集る作家たちは、お茶をすすっている者、瞑想にふけっているもの、原稿を書いている者など、各々が周囲のだれにとん着なく集っていた。クラブの隣にはトルストイの像のある庭園があり、後方の小がらな平屋の木造建築物が彼の作品「戦争と平和」のストーリーリの中で「ナターシャ」の住んでいた家にとり入れられたものだということである。私は本団の到着後再びこのクラブを訪ね作家同盟役員と話し合いたいことを伝えて彼女とお別れした。

地上最大の若者の祭典

フェスティバル入場式

七月二十八日、今日はフェスティバルの入場式である。われわれ日本代表団先発隊はモスクワ放送局の郷夫妻と同じくモスクワに住んでおられる土方君の奥さん、これに声学をこちらで勉強している小野輝子さんの三名を応援に加え、私が先頭に日の丸の旗を持ちその後にはノーモア・ヒロシマと「原水爆実験禁止協定を結ぼう」と日・露・英の三カ国で書

をたずねられたので、日本では古いロシアの時代のゴリキー、トルストイ、プーシキン、ツルゲーネフなどかなりたくさんのロシア文学が紹介され人々はこれを愛読している。しかし戦後のソビエト文学については、どうもすなおにはいただけないものが多い。その最大要因は戦後ソビエト文学の政治主義的偏向である。スターリン平和賞の受賞作品など、始めのころはかなり日本で翻訳され出版されたが最近あまり買入人もないようだとおく面もなくのべたのである。もう頭に白いものをおきはじめて四十九才の女史は私の発言に非常な興味をおぼえたらしく、吉沢君を通じて一つ一つうなづき「それから、それから」私の意見を聞き出すのである。

私はつづけて、しかし前回の作家同盟大会でのシヨロホフの発言や、イリヤエレンブルグの作品などスターリン没後に浮び上ってきた文学精神の回復は、新しい息吹きをおぼえると言いつづけた。女史はこの言葉が気に入ったらしく私と吉沢君を作家同盟クラブへさそってくれた。

作家同盟クラブ

文学が政治主義的欲求にとりつかれて大事

いたプラカードをかかげ、定期十時に農業博覧会前広場に集合した。七名の婦人代表はいづれも和服姿で、尺八の北原君は紋付羽織袴で参加し、その後ろに一般男子が十一名ならんだわけである。

各国代表もそれぞれ自国の民族的服装をもつてこらし、なかなか壮観である。パレードはトラックに乗って行こうのだが、フェスティバル実行委員会は、日本代表団があまりにも少数なので特別な配慮から、わえわれの行進する二台のトラックの中間にモスクワ市民によるプラスチックの車をつけてくれた。

打揚げ花火を合図にパレードが開始されるやモスクワの市内は歓迎する市民の「ミール・ミール」という叫びで沸き上った。進行中のトラックから求められるままに、またもに民衆と握手をしていたら五分とたたぬうちに手がしびれてしまう。三時間ほどのパレードをおえ、いよいよレーニンスタジアムでの入場式である。

入場はソビエトのアルファベットの順であるから日本は最後から二番目であった。ノーモア、ヒロシマのプラカードはとくに人目をひくらしく、スタジアムでの行進中に「ノーモア・ヒロシマ」を呼びかける各国代表

な批判精神を失うならば、それはまさに文学の自殺行為ではないか、しかしそのことは民衆の文学が政治と無関係に存在してよいということではない。エレンブルグの小説「誓どけ」が日本の労働青年に読まれ彼の訪日が歓迎されたのも、ソ連文学の政治主義的、図式主義的な欠陥に対する徹底的批判の立場においてソビエト社会の現実の生きた人間を描くことに真剣であるからだ。月並な聖像画家の筆で描きあげられた英雄より、なやみ、苦しみ、嫉妬し、恋愛し、失恋するといういろいろな弱点をもちながら前進してゆく人間を描くことがどれほどか重要であろうと、私の持論に吉沢君も加わり、かつての日、あのハジエーフも坐ったであろうこの同盟クラブのレストランで、トルコのコーヒーをすすりながら、私たちは声高く語り合ったのである。

話がさきにソビエト文壇に旋風をまき起した、ドゥチンツェフの作品「パンのみによるにあらざ」におよんだとき、シエウエローヴァ女史は、作者ドゥチンツェフの取りあげたソビエトの官僚主義は、役所や学閥のいはば上層部にのみあるかの如くとらえているが、これでは本当でない。ソビエトの官僚主義はもっと根の深いものであって、最後には

の声が、しきりと耳に入った。中央席に近づいたとき写真で見おぼえのあるフルシチョフ氏が両手を振ってわれわれに応えてくれた。ソビエト最高会議々長ウオロシロフ氏をはじめ各国代表の挨拶があつて後、モスクワ体操学校生徒三万人によるマスケゲームや、ソビエトの各共和国青年婦人代表の集団舞踊が広いスタジアムに敷きつめた緑の絨氈の上に、美しいメロデーにのってくりひろげられ夢の世界のようだ。とくにこの演技に参加した男女の健康なたくましい肢体には圧倒される。

私はこの場内でまぎれもない日本の柔道着をつけた五名の外国青年を見付けた。スイスの青年でフェスティバルで柔道を紹介し、次ぎの祭典では柔道の国際試合をやりたいといつてはりきっていた。主将株の青年は既に八年間稽古を積み、「タイオトシ」が得意で現在二段をとっているそうだ。三年ほど前、望月という日本人師範について習ったこともあるという、どうやら静岡市の養正館主、望月八段のことらしかった。



本 団 到 着

七月三十日、待ちに待った本団が到着した十日間の列車旅行の疲れも見せず、車中でこしらえた日の丸のマークを胸につけ、ホームから四列の縦隊で「東京・モスクワ」を唱

って駅前に行進し、ここで歓迎集会が開催された。岡田嘉子さんはこの日は和服姿で出迎えに来てくれた。

本団の到着とともに、日本代表団の動きは活潑となり、各国代表団との交歓会、職業別集会参加など、だれもが多忙をきわめ、そのうえ幹事会の討議はしばしば暁におよぶのである。

ハンブルグの青年と 半日語り合って

八月三日、朝、私は西ドイツ青年二名の訪問を受けた。西ドイツの社会主義青年として日本代表団には多数の社会黨員がいることを聞いてやって来たのである。話をすすめるうちにわかったのだが、彼等二名は一昨年社民党のハンブルグ支部から除名され、現在、同様の立場にある青年たち数十名とともにユーンゲン、ユレスボンデンス（若者通信）という月刊紙を発行して西独社民民主党の民主化斗争を続けている者である。

西ドイツ社民党は、世界の社会民主主義政党の、いわば草分けともいうべき古い伝統と大きな組織をもっているのであるが、だが最近はどこらかといえは党の主流はマルクス主

義的なものから、改良主義的な方向へ傾いて共産党に対しては、ドイツ民族に特有なナショナリズムから反共的立場を鮮明にしている。この二名の青年が党を追い払われたのも、共産党との共斗活動に起因しているといっていた。

私はこころみに彼等にハンガリア事件に対するソビエトの行った行為について、どう考えるか質問してみた。ところが彼等二名は二名とも異口同音に「ハンガリア事件が反革命であるとか、西独陣営の謀略であるといって片づけるべきではない。ハンガリアでもポーランドでも、民衆の言論出版をはじめ、政治的自由は人民に与えられていなかった。ラコシ・ゲレを代表とする政府が、人民の声を代表していないことを、何故早くソビエトは知らなかったのだろうか、この点の責任はソビエト側にある」と答えた。

また私が「最近のスターリン没後の政治的雪どけの中で、東独の統一労働者党（共産党）の中でも、その政治的比重が、どちらかといえは、旧社民系の者に移行しつつあるではないか」と意見を吐いたら、「まだまだスターリン主義のさばって困る」といっていた。だからドイツ社民党から除名された

彼等は、そのイデオロギイにおいては、決して公式主義的ないわゆる容共分子ではなく、はっきりとした社会民主主義者としての見解をもっているのである。彼等は、オレンハウアーに代表される現在の西ドイツ社民党は、かつての党首故シューマッハの時にくらべ、東西ドイツの統一、NATOの協定の破棄、重要産業の国営等、独立と社会主義への道について、非常に線が弱まって来ていることを歎いていた。

百万黨員を有するその組織は、この秋にせまる総選挙においてアデナウアーのキリスト教民主同盟をたおし、政権を取得することをわれわれも希望するが、しかしその際重要なことは、NATO協定を破棄する態度を社民党が貫きとおすことが出来るか否かである。われわれ及びわれわれと連絡をとっている社民党内の左派の人々は、即時廃棄を主張しているが、党の主流派は、一応アメリカ側の意向もただしてからその上でというように、その立場が曖まいである。選挙の公約でも、このことが薄れてきている。NATO協定の廃棄の立場なくしてどうして社会主義政党といえるだろうか。われわれはなによりこのことを党の内外に宣伝強化をしている。……と語

問題ではないといっていた。

さて私は彼等から日本における社会主義政党の現状についてたづねられた。私はまず左右の統一について、共産党との関係、党の組織の三点について答えたのである。特に共産党との関係については、持参した党、および総評、ならびに私の所属する社会主義協会の機関紙を提示して共産党が、組織労働者から心からの信頼を得ていないこと、その原因はかつて労働農民運動を党の革命組織に利用しようとしたこと、幾多の基本的問題で誤りを犯した直りの感もあるが、非スターリン化問題、ハンガリア問題等世界の共産党が各々の立場を鮮明にしたのに、一向にこれを示さないことなどから、大衆の日本社会党に対する期待の大きいこと、しかし日本社会党の組織は未だ近代的な階級政党として完成されず、七方黨員をつかむにいたっていない。また党の上層部、主として議員連中の一部には、保守党との誤りたる二大政党主義におち入り、政権担当を夢みて革命を忘れるむきのあること、を卒直に彼等に伝えたのである。また共産党との問題について日本社会党は左右の統一綱領において共産党は「競争相手」と規定し、

反共的立場からこれを「敵」と見ることはしていない。どちらの政党が真の社会主義政党であるか、お互にフェアな立場において競争し、勤労大衆の審判に答えて行くのが正しいのだと説明したら彼等はまったく同感だといっていた。

私と西独社会主義青年とは半日近く、いろいろの問題について語りあった。私は、モスクワ滞在中にイタリアのネンニ派の社会党員ポーランド労働者党の青年と会合したいから彼等にその労をとってくれとお願した。右傾する社民党から追われ、しかもその社民党の純化のために限りない愛着と情熱をもってわれわれ日本の社会党員をたづねてくれた二名の西ドイツの友に、固い握手をかわして別れたのである。

公務員の労働者集会

八月十二日から三日間、公務員労働者の集会が始まった。これに参加する日本組代表は自治労から五名、ほかに全農林と全国税から各一名が参加し、日本の官公労の闘いを私が報告することに決った。

会場に当てられたキエフスカヤの会議場は一寸、清水市役所の建物に似たモスクワでは

私の報告草案(別掲)は第一日目の各国代表の報告が幾分冗漫のきらいがあったようになので、みんな協議した結果、日本官公労の今年の春季斗争と当面する秋季斗争の性格にしぼって説明することになり、前後はほとんど徹宵で草案を書き改め、吉沢君がこれを英文に翻訳した。拍手とフラッシュのおわるのをまわって、「世界の友だちに、日本官公労労働者の闘いの現状を報告できることを感謝します」と語調をゆるめて発言した。つづいて吉沢君が英語で話しかけ、かわってロシアの婦人がロシア語で通訳するのである。これがイヤホンで更に独、仏語で伝えられる仕組みになっていた。私がアメリカ占領軍の労働政策の項を説明しかかったとき、後方の席から眼鏡をかけた智的な容貌の青年が出てきて通訳中のロシア婦人を押しよけるようにして交代した。この男の通訳はすばらしく英訳する吉沢君の原稿を横にみながら、彼が終るやすかさずロシア語で、私が抑揚をつければこれに呼応して通訳してくれた。私はこの演説の中で一つのユーモアをこころみた。もともとこれは全農林の樺山君の入智恵で、官庁労働者の青年婦人は低賃金のため、結婚することさえ困難であるということである。私はこれを

珍らしいモダンなガラス張りの建物であった八十四カ国の各国公務員が集まっていた、東ドイツの官公労代表が議長席につき、オランダ、キプロス、フィンランド、デンマーク、スイスの順に各国公務員の生活実態や労働組合の現状が報告された。場内には露、英、独、仏、四カ国語に通訳されるイヤホンが設備されていた。私は終始通訳の吉沢君によりそい、各国代表の報告をメモした。その詳細は別にゆづるとして、西欧各国の公務員、あるいはそれらの国によって搾取されるアジアアフリカ植民地国の公務員労働者は、労働時間短縮、給与引上げ、男女同一賃金等の要求をかけたての闘いを説明し組織の強化と国際的団結の必要をこもこも強調していた。しかし東独やチェッコ、さらにソ連など東ヨーロッパ諸国の代表者の報告は、がらりとその趣を異にする。「東独は全部労働者の国だから労働者のほかに主人公はいない」とか「予算を少く使って最大の能率をあげることに公務員労働組合は力を注いでいる(チェッコ)」などの発言にはじまり、病院、恩給、託児所などの社会保障の概要や時間や休日休暇など、いづれも結構づくめな報告である。われわれ日本組代表は、すでにモスクワにきて

報告の中で、「現にこの私は三十才を越えているが独身である。いま私の通訳をしている吉沢君もまたそうである」と隣に立っている吉沢君を指さしたのである。吉沢君はびっくりしたような顔をして聴衆にこれを説明した。一瞬場内は爆笑した。私はこの笑いのおさまりをまわって、一九五五年以降の官公労、民間労の統一斗争の説明をし、最終を原水爆禁止で結んで「ミール・イー・ドルーヂバー」をさげんで降壇した。

各国のだれの場合よりもはげしい拍手であった。再び演壇で両手をふらねばならないほどだった。議長席にいた西独やソビエト、オランダの代表者たちが、手をのべて固い握手をしてくれた。その間場内は拍手をそろえて「ミール・イー・ドルーヂバー」を何回ともなくさげんでいた。自席に戻ると富山県職の酒井君や国税の丸さんが、「よかったぞ」「成功だ、成功だ」といってくれたが、すっかりあがり気味の私は、私の報告をより以上に充実させ効果あらしめてくれた通訳のソビエト青年にだれより先に感謝の握手を送るべきことを忘れてしまった。この青年は、実は全ソビエト公務員労働評議会の中央委員で国際公務員労働評議会の国際部長だといっているので

以来、鉄道、電力、鉱山、病院などを訪問し手わけして調査を行っているので、ソ連の労働者の実体について多少つかんでいる。しかしチェッコや東独のことについては、なおよく彼等と話し合ってみないと、この報告を報告どおり受け取ってよいか、大いに疑問のあるところだ。会議の休憩時などに東欧の代表者をつかまえては疑問の点について質問を行い資料の提供をもとめたが、公式的な回答やあまりにもこまかな説明などをうけて閉口してしまつた。

日本官公労を

代表して登壇

会議の二日目、十三日の午前十一時、フィンランドの代表につづいて、議長席から「ヤポニー・デリガシー(日本代表)スギヤマカナヲ」と呼びあげられた。アジア諸国で報告するのは日本のみであるから登壇の冒頭から私は一斉のカメラのフラッシュをあびた。前列の代表者席から、長野県職の森山君が「おちついて、おちついて」と声をかけてくれているのがわかつた。

った。会議のあとモスクワ放送局員にインタビューをうけたが、どきまぎしてあまり上出来な応答は出来なかつた。

夕刻街でビールを飲み、ホテルに帰つたら八月五日の消印のある県職執行委員海野裕一君からの懐しい航空便がついていた。「静岡市職の問題は暴力団の介入、その他常識はづれの圧力があつて市職の執行部がとうとう単独で団交に入ることを決めてしまい、向う側の思うつぼにはまつてしまった。山田市長は鼻を高くしているそうです。残念ですがこれが現状です」と彼の手紙は終っていた。退職勧奨しようによる用務員遠野氏のショック死、これに起因する市職の人権斗争に奪斗する県連の仲間たちよ、斗いはいよいよ困難になるだろうが、最後までがんばってくれと祈らずにはいられなかつた。

モスクワ市長をたずねて

会議の第三日目、今日はソ連の厚生省とモスクワ市役所を訪問することになっていた。われわれ日本代表団は、自動車の手配が悪くて遅れてしまいモスクワ市役所で行く追いつくことが出来た。労組出身のスミス市

長は、五百万人の人口と年間総予算六八億（うち二〇億ルーブルが政府よりの財源補助）のモスクワ市の沿革や、執行常任各委員会、各部署の活動状況、商業網、医療および文化厚生機関について説明してくれた。

この市は、日本の特別市に等しく電車、地下鉄、ハイヤーおよび自動車修理工場からアイスクリーム売りなど九百種の営業がモスクワ市の経営するところになっており、市の財源は、これら社会主義経済の蓄積をもってあてていると説明していた。議員は六千名に一名の割で労組、民主団体の推薦によって選ばれ、現在八五三人の議員中婦人がその四五パーセントをしめ最低十八才からなる議員の平均年齢は三十五才である。常任委員会は十六で保障、建設資材の両委員会に重点がおかれ、必要に応じて市民の各団体代表がこの常任委員会の討議に参加するのを特色としている。

市役所や市営事業の従業員の特遇等については当局者と団体協約を結んで守られているが、当局といっても労働者の評議会が任命した市長であり局長であるので、労働者に敵対するものではない。しかし当局者の仕事はそのあたえられた計画を遂行し、計画によって定められた利潤は、もちろん、計画を超過す

しかし、この反動の嵐の中でわれわれは、いわゆる順法斗争という名の戦術を使って労働基本権の實質的な奪還をめざして、困難な闘いを続けてきた。順法斗争とは国鉄、全通などの労組が最も勇敢に用いた戦術である。例えば、列車の運行に必要と定められた人員や器材が当局者の怠慢によって充足されない場合は、この斗争で指定された職場においては、輸送の安全を確保するために、これが充足される時まで列車の運行を停止させるのである。デスク・ワークの職員組合にあってはしばしば定時の出退庁や年次有給休暇を一斉にとるなどの戦術をもって闘ってきた。

こうした闘いによって、一九五五年以降、ようやく官公庁労働者の統一行動が組まれるようになった。日本の官業労働者の賃金は、同一労働の他の産業労働者に比べて低額である。為替レートでは一ドルは三六〇円に換算されているが、日本官業労働者の平均給与ベースは一五、四八〇円である。その中には一・五人の平均扶養家族手当が加わっている一六、〇〇〇円以下のサラリーマンの者は全体の七〇%であり、そのうちの五〇%は、一二、〇〇〇円以下であり、更にその中には八、〇〇〇円以下の者が四四%をしめている。しか

る利潤をも産み出すことにあるので、ときとして労働者の利益を充分に顧慮しない場合も多い。たとえば労働者住宅がひどい状態であるのに、それを増強しもしないで放っておいたり、必要な保安設備の予算をよそにまわすなどがそれである。労働組合は団体協約で結ばれたことがらが正しく守られているかどうか、右のような違反が行われていないかどうかをたえず監視して労働者の利益を守るのであって、紛争の大部分は、労働法規や政府の決定や、団体協約の内容などをどう解釈するかという問題である、労働組合が紛争を解決するための手段としてストライキを行うことはない。組合は生産性向上の運動を労働者の間に組織したり、産業技術修得の労働学校を運営するなど、こう見てゆくと資本主義国ならまさに一般のダラカン組合ということになる。

しかし労働者が国の主人公であり、搾取がなく、労働の生産性が向上しても労働の強化や失業にはならない労働者の国であるならば資本主義国の組合を同じ基準で比較することは完全にあやまりである。われわれ労組代表は残された滞在期間中に、この点についての調査をできる限り一つづつゆかなければなら

し他の産業労働者も格別良い給料を得ているのではなく、日本資本主義の伝統的な低賃金体制でかためられている。だからわれわれ官公庁労働者の低賃金の困みを破るには、民間産業労働者との統一は不可欠の要件である。ことに一九五五年、炭労、国鉄を中心とする官公労、民間労の統一斗争を展開することに成功し、この力は年をふるごとに強まってきた。この春の闘いは、日本官公労働者の賃金ベースの引上げと、「最低賃金制度の法制化」を要求して組まれた統一斗争である。この闘いで就業時間中の職場大会や順法斗争によって多数の同志が解雇、減俸等の処分をうけるにいたったが、われわれの力はこの弾圧によって、いささかもひるむものではない。かつて終戦直後のインフレの飢餓状態からの脱出のための闘い、あるいはデフレ下の企業整備による首切りと労働強化との闘い等、日本に再軍備を強制するアメリカ独占資本と、これにつながる日本独占資本を代表する政府との困難な闘いを経験した日本官公労は、これらの経済的要求の実現の闘いとともに、国土に外国軍隊の駐留することに反対し一切の軍事基地設定に反対し、平和と独立のための運動にもその先頭に立って闘っていることを

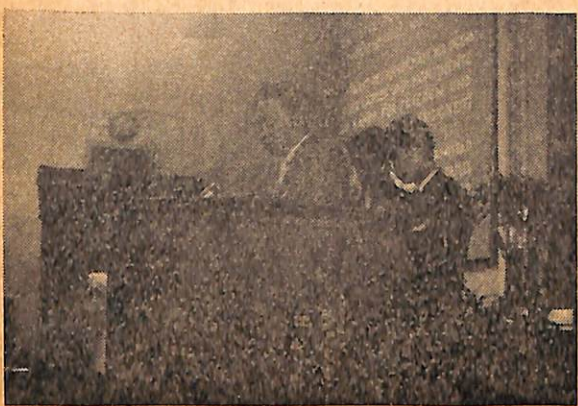
らないと思つた。

公務員労働者集会での杉山報告

いま、日本の公務員労働者は、長い間の念願であった「労働基本権の奪還」と「最低賃金の法制化」をめざして闘いをつづけている。そしてこの秋の闘いは戦後最高のものであることであろう。

日本の公務員労働者を大別すると、公有の鉄道関係者四〇万、電信電話関係者三十六万、国家公務員八万、地方公務員四十七万、そのほか教職員六十一万もこの中に加えられ合計一九〇万人が各々労働組合を組織している。一九四八年、アメリカ占領軍は、その軍事的必要から一九四九年にかけて官業労働者の全組合に対し、スト権、団体協約権、団体交渉権等の労働組合の基本的権利を持つことに制限を加え、日本政府をして一連の反動的な措置をとらしめたのである。国鉄、全通、全印刷、全林野などの純粋な現業労働者の組合からもスト権を行使することを法律をもって禁止、戦後民主主義的な教育を遂行するのに非常な力があった教職員は地方公務員にその身分を変更され、国家公務員、地方公務員はスト権はもとより団体協約権を持つことすら削減されてしまったのだ。

世界の動らく仲間達に自信をもって報告できる。日本の全労働者と、労働組合は労働基本権を持たねばならないことを主張するとともに原水爆の実験を禁止し、世界の平和を守るための運動には、あくまで闘いぬくことをお誓いして報告を終る。



官業労働者集会で代表演説する筆者

原子炉もある農業博覧会

われわれのホテルの近くに農業博覧会がある。博覧会といってもこれは一時的な見せ物と違って、二百ヘクタールの面積にソビエト連邦社会主義共和国の十六の共和国を中心とした三百館以上の建物からなっていて、ウクライナ、ペロルシア、ゲルジョア、アゼルバイジャン……など各共和国の民族と風俗を象徴したその建築は、意匠といい色調といい、建築博覧会の名にも値するほどに充実したものである。一九二三年、ゴリキー文化会にアメリカ製のトラクターを主とした農業耕作機械を陳列したのがその初まりで、今日までに三回の改造移転を行ってでき上ったものである。各共和国の農産物、民芸を展示するほか、農作物の改良と増産指導や現在の生産額と将来の生産計画がひと目でわかるようになっていいる。畜産館、機械化電化館ではホルホイズの生産をより高めるための農業機械が展示され、小麦やトウモロコシの刈入機、小麦トウモロコシ棉花などの播種機械、草取り機械馬鈴薯の種子と同時に肥料を施す機械、乳製品を作る機械、搾乳機、害虫の消毒のための飛行機、その他農村電化のための電気器具

農業博覧会の入口で



の団員中の東京工大の教授や農業技術の専門家たちが、毎日この農博に行き農業機械と取り組んで実験統計をとり、あるいは参考資料を取りよせるなど、その熱心な研究態度は農博始まって以来だと現地のソビエト関係者をして感心させている。しかし学問的研究の対

や小型テレビが陳列されていた。また有名なミチューリン農法の果樹園のところには、ミチューリンの銅像が立っていた。ミチューリンが生れてから今年で一〇二年になる。鉄道員上りの彼は自己の経験を基礎として、三百以上の新しい植物の品種を作り、風雪の多い北辺の地に果樹を栽培するなどその功績は大い。たとえばリンゴのメスとオスの花粉交配によって、母から耐寒と収穫の要素を、父から味覚を得た。しかもその栽培は地理的に離れているほど成果があり、その距離は遠く一万四千キロにわたり、一九一七年からは雪の多いシベリヤ地方で低いリンゴ樹を作って果実を生産することができた。穀物の場合も同様の原則にしたがい、ルイセンユによって有名な遺伝と環境の学説を生むにいたったのである。

その他この農博には農産物実験所もある。またおどろいたことにはこの会場の一角にソビエト原子力発電所の模型とともに、実際の原子炉があるのだ。直径四米、深さ六米のこの原子炉は、その中にはウラニウム二三五が二十グラム、同二三八が十グラム入っているということである。ともかくこの農博を綿密に見学すれば、ゆうに一週間以上はかかるで

象として興味があっても、日本で参考となるものが、あるだろうか……と語っていた。

農業博覧会は、クレムリン、レーニン、スターリン廟、モスクワ大学とともにこの名所の一つであり、会場内には地方のホルホイズ員や水いらずの団体組、恋人同志など、いろいろの民族が、それぞれの国の服装で集ってきていて、さながら民族博覧会場といった風景である。しかしまた、つい今しがた土を払って出てきたような素朴な木綿服の人々も他のどこよりも目につくのは、恐らく農村の人々が多いせいであろう。この農博はソヴェト農業の、眼で見る実際教育の場であり、社会主義計画経済の集約された型であり、公園であり、遊園地でもあるのだ。

ヒロシマの悲劇をくりかえすな!

五十万の大集会

八月六日、それはわれわれ日本人にとって忘れることのできない広島への原爆投下をうけた日である。この日私達は、日本代表団主催による「原水爆禁止集会」をモスクワ河畔の集會場で開いた。会場の一室に日本から持参した広島長崎の被害実相を訴えるための写真、あるいは焼津の福竜丸乗組員の蒙ったビ

クレムリン宮前レーニン廟の参観者



あろう。それを、この道ではズブの素人の私達が、ほんの数時間で、ところどころを自動車を利用して見回ったのにすぎない。会場でもまたま私は、われわれと前後して入った小峰喜太郎氏を団長とする日本経済使節団員の一行に行き合った。産経の加藤特派員は、こ

キニの死の灰の記録などを展示し、集会の最後には亀井文夫監督の手になる記録映画「砂川」と「生きていてよかった」を十六ミリフィルムによって上映することになった。しかし何分にも旅券斗争のあわただしい中で準備したものであり、努力して収集した資料も、担当者に旅券が下付されなかったりしたため携行できなかったりして、展示資料は決して充分なものとはいえなかった。そこで全学連の本部から託された砂川基地反対斗争の写真あるいは沖縄原水協からの沖縄同胞の闘いなどの写真をも展示した。会場が非常に判りにくい場所であったこと、すでにフェスティバルの諸行事が輻そうして開かれていることなどが影響してか、期待したほど各国代表者の参加を見ることはできなかった。しかし中国や印度の代表たちが定刻十時にそろって入ってきてくれたのは有難かった。その他、東ドイツ、フランス、オーストラリアなど日本代表団と併せて四百名ほどの参加者でこの集会は始まり、アメリカ代表の数名も途中からかけつけてきてくれた。しかし諸決議に引きつづいて上映するはずの映画は、映写機の故障で、ついに止めなければならなかった。今日は東京で、第三回原水爆禁止世界大会が開か

れることになっている。核実験の即時、無条件禁止を決議する日である。われわれ日本代表団はこの東京大会に呼応して、地球の裏側にあたるこのモスクワで、「原水禁集会」をもつことは米英ソ三国青年学生代表による「原水爆禁止協定」締結の共同決議を実現することとともに大きな使命としてきた問題である。幸いにも共同宣言の方は、いろいろ折衝を重ねた結果、去る八月三日、米、英、ソ、日の四カ国青年学生代表の共同コミニケを发表することができたが、今日のこの集会はどう見ても成功とは言いがたく、頭がなんとなく重かった。だがこの晩、クレムリン横のマネーシナヤ広場で開かれた、フェスティバル実行委員会主催の「原水爆禁止世界青年の夕べ」は、五〇万人といわれる人々の参加を得て、壮大な平和の示威が行われ、屈間の私の杞憂は一辺にふっとんでしまった。フェスティバルに参加した日本代表団は、この夜のこのとおそろく生涯忘れられることはできないだろう。

夕暮れ近い六時、会場周辺には、軍隊、警察官がサドーバヤ（環状道路）に三重にも四重にも列を作り、さらにトラックを横にならべるなどして、都心に乘入れる自動車をストップ。

「原爆を受けた後、ヒロシマとナガサキでは、数千人の孤児と未亡人、原子病に苦しむ病人、生活を破壊されて貧苦になやむ人々が残りました。それにもかかわらず、さらに強力な破壊力をもった水爆の実験がつづけられて、全人類をおそろしい威嚇のもとにさらしています。全世界の親しいお友だちのみならず、ヒロシマの悲劇を二度とくりかえさないために、青年たちに明るい未来と幸福な生活とをもたらすために、わたしたちは堅く力をあわせましょう。わたしたちが一つに団結してさえすれば、平和がこの地上で勝利するはずですよ」と。

通訳する土方君も真剣だ。満場水を打ったように静かな会場に、切々として訴える彼女こそ、このフェスティバルにおいて平和使節の使命を果たした第一人者であろう。「ノーマア、ヒロシマ、原水爆禁止」と結んで彼女が降壇しようとしたとき、嵐のような拍手の中にロシア婦人がかけ上ってきて、彼女をしっかりと抱きすくめ、やさしくショールをかけてやったときには、その会場にいる金髪の少女もアフリカの黒人も、涙を流さなかったものはなかったであろう。

この後、日本代表団は全員壇上に整列して

アップし、私たちのように参加者バッヂをつけた外国代表と大集会参加券をもった者しか通さなかった。一人の可愛らしい子娘が私に一緒に連れて行って欲しくないかといってきたので、二人で腕を組んでこの封鎖線を通過しようとしたが、にべもなく娘の入場は阻れた。「なぜ、一緒にいけないんだ？」と私が抗議すると、この会話をきいていた群衆の中から「一緒にきたんだから入れてやれ」といった意味の声援がしきりにとんだ。下士官があらわれてとんできたので、私が「ヤボンスキーデレガ！ツィヤ（日本代表団）」だといったところ、一寸考えていたようだが、「バジャールスタ（どうぞ）」と二人とも中へ入れてくれた。とたんに群衆が「ハラショー」とさげんで拍手を送ってくれた。つぎの封鎖線もこの手で突破できたのは、今夜の集会は日本代表団が花形であるからだろう。ある個所ではモスクワ青年が、警官の封鎖線を突破して、ドーと広場をめがけて殺到し、騎馬巡査がこれを阻止しようとするなど、まるでいつか映画で見た、どこかの暴動シーンみたいだった。しかしこうでもしないと、外国代表団が通行することができなくなってしまうからであろう。

井上頼豊氏の指揮するオーケストラの伴奏で「原爆ゆるすまじ」を合唱した。最前列にいらんだ私は、歌いながら広場の全景をみた。サーチライトに各国の旗がはためき、クレムリンの城壁から歴史博物館、モスクワホテルまで、顔、顔、顔で埋まっていた「原爆ゆる



大人も子供もサインを求めてくる

ちょうど月が昇り始めたころ、大通りの一角から沢山の炬火を捧げ、プラカードや旗をかかげた各国代表団による「平和と友情」の行進がやってきた。

十二年前の八月六日の悲しみと怒りの声をこめた示威ともいえる行進が肅然としかも陸續として進んでくる。広場が真黒な群衆で埋まったころ、ソヴェト軍のサーチライト自動車、「平和は人類の意志」「ヒロシマをくりかえすな」「原子兵器を禁止せよ」という大スローガンを水平照射で浮きたたせた。小さな少女が中央壇上の大炬火に火を点じ焰がもえあがる。オーケストラは壮麗なシンフォニーの二節を奏で、ステージの後方に設けられた大映写幕に、ぶきみなキノコ状の雲がわきたち、苦悩と怒りに歪んだ女の顔がうつる。……（映画ヒロシマなどから抜萃したもの）

原爆被災者を代表して、長崎の永田尚子さんがマイクロフォンに近づき、広島と長崎の悲劇を語った。四才のとき原爆で母を失い、彼女もまた放射能の熱線で咽喉を冒され、器物をそこに差し込んで呼吸をする見るからに脆弱な体をした彼女が、五十万の参集者を前にして訴えた。

酒類はよく売れているゲーム百貨店にて



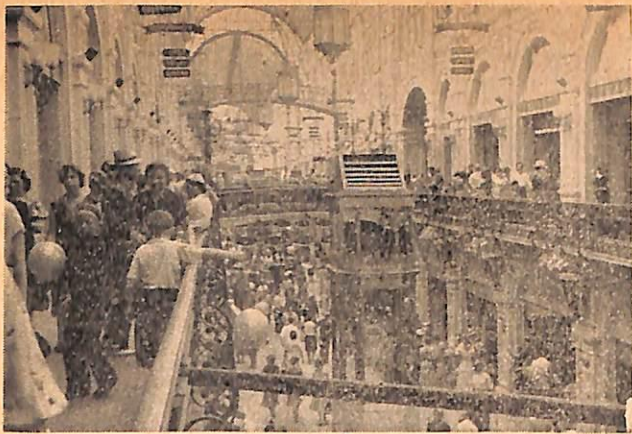
百貨店風景

「すまじ」を合唱している顔だ。

日本交通公社が、われわれのために発行してくれた「モスクワ案内」によれば、「市内には百貨店、商店、レストラン、大衆食堂、

軽食喫茶店、カフェー、一杯屋など、一万二千軒あり、その数は年々増加している。」と説明があった。モスクワにはゲームとツームと呼ばれる二つの百貨店がある。前者はソ連最大のデパートで赤い広場の前にあり、後者はスヴェルドロフ広場の近くにあつて毎日なかなか繁昌している。その隣の方に「子供天国」という名の最近で上がったばかりの大階建てモダンなデパートがあつて、玩具、絵本、乳母車、工作用品など文字通り子供用品ばかりならべて売っている。ゲームは私達が滞在中の日用品や、土産品などをかうために一番利用したデパートで、古い建物を最近改造したものらしく、貴金屬部、玩具部、衣料品部など、それぞれ百四十部門の独立の専門店街のような形式をとつていて、モスクワの最大の食料品部があつてか、いつ行つても主婦達が一杯につめかけていた。しかしそこに陳列されている商品は、種類といい、デザインといい、淋しいかなわれわれ日本人の眼を楽ませてくれるものは、ほとんど見当らなかつた。食料品部について客足の多いのは、室内装飾用具、装身具、絵はがきフェスティバルの記念品などの、日本流でいえばオシャレの店であるが、日本の店にはまだま

の旅費の一部を捻出しようかと考えたが、幸か不幸か中国訪問の計画は中途で変更して実現できず、松本氏愛用のカメラ、アルコは今日無事に本人の手に戻ることができた。



モスクワ、ゲーム百貨店の内部

だ遠く及ばない。だが若い女性とくに高校生ぐらいの女の子が沢山つめかけていて、私たちが何か買物をしようと思つても陳列台の所まで達するにはなかなか困難であつた。

市内にはデパートのほか自転車、スポーツ用品、呉服などいづれも国営の専門店があるが、品質はおせじにも上等とはいえず、ハイヒールや紳士靴、洋服などは、目の出るように高価である。外貨の割当ての問題で日本大使館をたづねたときに、門脇大使が、「モスクワでは水以外に買うものは無いよ。」といつていたのも、この間の事情をいつたものである。

ある日私は、ポーランドの代表たちと連れ立ってゲームの中を見て歩いたときに、私は彼等に「どうも商品の種類も、その質もまた売子のサービスも、あまり感心しないな。」とロシア青年を通訳にして話しかけたところポーランドの青年は、

「いいえ、どうして、たいしたものですよ。ワルシャワでは、こんな豊富な商品を見ること

とはできません。」

と言ひ、次のように言い足したのである。「それというのも戦後十年間ソ連はポーランドの国内から、無償で石炭を持ち去つたりしたから、ソ連国民はこんな良い生活ができるんだ。」と、

こう言う言葉を私に通訳するロシア青年の顔を私は見た。彼の顔はゆがんでいた。石炭を持ち去つたことが或いは事実であつたとしても、それをこつこつという場所、わざわざする必要はない。そういう気持があつて顔を曇らせたのか、通訳する言葉の一つ一つに力がなく、聞いていて気の毒に思つたのである。

風変りな専門店に、不用品の売買斡旋所がある。外国旅行者から時計、写真機、万年筆などを買い上げていた。われわれの仲間達も土産品代に充てるため、ここの御厄介になつた者が多い。日本から持つていったナイロンのYシャツや靴下、成功社の腕時計などが換算レートより三倍位割良く買つてくれたといふことだ。私も、もし帰途、中国を訪問するようなことにでもなつたなら、本人には後から事情を話して納得してもらふこととして、県職副委員長の松本氏から借用したカメラを、ここに持つていって、香港と羽田間

ウオッカの 飲み屋は見当らない

日本を出るとき仲間の者が、きまつて私に注意をしてくれたことは、「ウオッカを飲み過ぎて胃をこわしてくるな。」といふことだつた。中国では公式のレセプションでも強い支那酒が出て、挨拶の都度、乾杯してコップを逆にして酒を飲み干したことを示すのが礼儀だといふことを聞いていたが、ウオッカでこの流儀をやられた日には、ぶつ倒れてしまふだろう。もしこつこつという席に出たときには初めからジュースの組へ行こうと、腹の虫に言い聞かせて来たが、予想に反してその必要はなかつた。それというのは、どこか席へ出て、あまり酒というものにはお目にかからなかつたからである。東ドイツやユーゴ、イギリスなどの代表国から招待をうけたとき、ユニヤックやブドウ酒、あるいはなま温いそれも水っぽいビールが出たぐらいで、「モスクワ案内」に説明されていた「カフェー、一杯屋など……その数は年々増加している。」などは、どこの国の話なのか、このモスクワにはそれらしい店がないのである。だがロシア人の酔っぱらいの姿は、しばしば

街で見受けられるのだ。われわれは外国の青年学生という若者の代表であるから、故意に酒を遠ざけるのだろうか、最初は疑問に思つたがしかし間もなくこの謎を解く事ができた。それというのは昨年の秋頃から全ソ連の主要な都市の議会は、婦人団体からの強い要請に応じて、大衆食堂や軽食喫茶店から酒を開放し、つづいて市内の一杯屋を法律によつて閉鎖してしまつたからである。風雪や寒夜のつづく北の国の人々は、その生活上の本能から強い酒をよく飲む、かつての帝政時代の生活が、希望のない暗いものであつたから余計に酒にしたつて日々のうさをまぎらわして来た風習からかもしれない。今日心臓病と高血圧は、ソ連の国民病ともいわれている。ウオッカで二日酔して明日の労働に差支える者も多かるう。いずれにせよ現政府は革命四十年にしてこのウオッカ問題に取組み、酒は家に帰つて飲むように、若者はウオッカより旨いブドウ酒に親しむようにと、ウオッカの値段を上げ逆にブルジョアの良質なブドウ酒などもその値段を原価以下に値下げするなど、その対策を考えてきているらしい。だから食料品店やカフェー(ホテルなどに付属している、日本のそれとは大分内容が違ふ)でだけ

酒は売られていて、日本のバー、一杯屋みたいな店が見当たらないのだ。ラッシュアワーになると、食料品店や酒類専門の販売店は自宅に急ぐ労働者でにぎわっていた。しかしながらたとえ規則や法律でどう取締ろうと、酒を愛する人々の心理は共產主義の国でも同じことで、一杯屋が駄目なら食料品店のカウンターの横で、手取り早くおっ始める者が出たので、今度は食料品店の店頭での立ち飲みを取締らねばならなかった。こういう酒類の販売制限の中で、ビールだけは例外で、街には生ビールの立ち飲み所がある。ひと頃の日本の国民酒場ほどではないが、カウンターの向って労働者や大佐級の将校まで連って、現金と引換えに鉛のメタルを受取り、丁度鉄道ホームの洗面所のように、ならんでいるビールの蛇口にデロッキをおいて、その上にメタルを入れると自動的にビールが出る。ここでは「すず子」か「鮭の燻製」などつまみの魚が比較的安い値段で売っている。

ある日私は前から隣りで飲んでいるロシア人のオッサンが、ばかに周囲に気を配る気妙なその仕草に注意していたところ、彼は上着の下にカクしていたビンからビールのジョッキへウオッカを注ぎこもうとしているところ

物価が高いが暮しは楽だ

一般にモスクワ(ソ連全般についても)の物価は高いといわれている。しかしこれを正確に補足し説明することはむずかしい。私はモスクワ放送局に勤めている郷さん(東京出身)の奥さんに手伝っていたら、モスクワの物価をメモしたが、これによると

黒パン	1kg	八・五〇
コッペパン	1kg	〇・六八
バター	二〇〇kg	五・〇〇
牛乳	〇・五ノ	一・二
砂糖	1kg	九・四
角砂糖	1kg	五・五
ソーセージ		
カルパチャー	1kg	一三・〇〇
ウインナ	1kg	一七・〇〇
キャビア		
黒	一皿	一三・〇〇
赤	ク	五・〇〇
水	コップ一杯	〇・一五
ジュース	ク	〇・四
アイスクリーム		一・五ノ二・〇〇

ウオッカ	四合瓶	二五・〇〇
ユニヤック	ク	七〇・〇〇
化粧品けん	(並)	一・〇〇
鉛筆	一本	〇・一ノ〇・二
万年筆	ク	二〇・〇〇ノ六〇・〇
腕時計	三三〇・〇〇ノ一、五〇〇・〇	
ナイロン靴下	一八・〇〇ノ四二・〇	
ラジオ	二四〇・〇〇ノ六〇〇・〇	
テレビ(五吋×四吋)		七五〇・〇〇
	(一〇吋×七吋)	二、二〇〇・〇〇
電機冷蔵庫		六八〇・〇〇
電機掃除器		六〇〇・〇〇
電機洗濯機(中)		六〇〇・〇〇

といったところである。円とルーブルの換算レートはこの四月から、従来の一ルーブルが九十円であったのを三十六円に引下げられた。しかしこれを標準にしたところでおお物価高の定評は免れまい。私の感覚からいえば一ルーブルが二十円から二十五円といったところが妥当ではないだろうか。衣料品は一般に高値であるが、作業衣や年少者の服などは低廉で電機の冷蔵庫や掃除器、図書やレコード、楽器なども安値である。婦人を家庭の雑事から解放するため、また民族の文化向上の見地からとられた二重価格政策からであろう

四種類くらいの高級化粧品セットが一五〇ルーブル、ミンクの襟巻は二、〇〇〇ルーブルもするという具合に、生活必需品は安く、贅沢品は高く、収入の多い者は高級レストランで黒キャビアとコニヤックをたのしみ、収入の少ない労働者は赤キャビアにウオッカで気えんをあげることができるのだ。

ソ連の産業と日ソ貿易

ある中年の男が私にこういった。

「モスクワ娘は、このごろ目に見えてオシャレになった。そこへ、こども世界各国からスマートな服装の若者たちが入ってこられては、彼女らのオシャレは今後一層の拍車がかげられるだろう。」

と、現地の日本人特派員連中も、このことについては同感だった。

かつてマレンコフ政権は、戦後ソ連の重工業生産第一主義を批判して消費財生産に力を注ぎ、これによって失脚の要因を作ったといわれたが、革命後四十年、幾多困難な事情のなかから国の経済的独立と、国防能力の土台である大規模な重工業建設の重点政策のかけ、おき忘れられていた消費財の生産が、真面目にとりあげられなければならない時点に

到達し、つづくブルガーニン政権下でも、消費財の生産と流通機構は緩和され、靴や織物などの生産テンポは、次第に早まってきたのである。産経の加藤特派員は、さすがその道のジャーナリストらしく、将来の日ソ貿易を考える場合には、シベリア開発五カ年計画に手を組んで精密機械製品などの輸出を考えることが必要だが、いま手取り早く取引をしようというなら、日本の軽工業製品が有望だ。自転車、ミシン、瀬戸物、雑貨など、ソ連の人々にとっては飛びつきたいほど欲しいという製品が、日本ではあまっている。もしかりに、新潟、ナホトカ貿易が開かれたとしたら、建設シベリアの何億という需要者に、一番地の利を得ているのは日本であるはずなんだが、……といって彼は言葉をにごしてしまった。それはそのはずだ。日ソの間には、国交回復、通商協定の成立をみているがなおコムによる輸出統制が横たわっている。またパートナー取引という厄介な方式が存在しているチンコムにせよ今日世界の動向としては、各国ともに、自国の経済樹立を第一義に考えて逐次緩和の方向に傾いているのだが、アメリカとの関係が浅からぬ日本政府であつてみれば、こうした問題と積極的に取り組む熱意を

期待することは望み薄で、この軽工業製品の新潟、ナホトカ貿易も所詮は取らぬ狸の皮算用に終りそうだからだ。よしその道が開かれたとしても、いまから三年や四年先に実現するという話だったなら、そのときはソ連側でもナイロンシャツにしる、腕時計にしる、立派な軽工業製品が出回ってくるであろう。物によっては、こちらを凌ぐかもしれないと見るは過大な推測であろうか。中小企業の不況のおりから、まったくもったいない話ではないか。

ゆきとどいた社会保障で 家計は黒字

また一般的な物価高の緩和剤として、養老年金、健康保険、労災保険など社会保障制度が消費者の家計を救っていることも見落すことはできない。

いま国家は住宅不足の緩和のため、建築の主眼を文化アパートにむけている。五階のブロック建築で一世帯が十坪から十二坪、ついで八坪くらいの部屋が一ノ二室、これにガスレンジ四、湯道、水道が敷かれ、ステンレス製の大小の「流し」とデユラの調理台、その上に回転と水切りの戸棚を備えたリノリユ一

ム敷きの台所、バスタイルを貼った風呂場、物置、便所が付属するという規格で統一されているが、ここに生活する中流以上の四人家族の光熱費は、
(単位はルーブル)

ガス	一カ月	三・〇〇
電気代		五〇・〇〇
電機冷蔵庫		一〇・〇〇
電灯		一〇・〇〇
テレビ		一〇・〇〇
屋賃		五六・〇〇

といったところである。アパートの居住者が電機洗濯器を備えていないのは、毎朝、紙袋に入れた汚れものを、洗濯屋が目方ではかって持ってゆくからで、日本のような光沢のきいたビンとしたワイシャツの仕上りを期待することは無理な話である。アパートの階下のレストランが、思いきり広くとってあるのは、将来なるべく階下のレストランで栄養価の高い低廉な食事を家族団欒でとるように指導したいからだそうだ。

交通機関の料金は

地下鉄	五〇K (全線)
市電	三五K (ク)
トロリーバス	三五K
バス	二五K

一ルーブルあたり

合の代表とが相談して決めている。基本賃金とはきめられた労働ノルマをきちんと遂行した場合に支給される固定賃金で、労働ノルマを遂行できなかった場合は、その割合に応じて基本賃金が引かれ、ノルマを超過遂行の場合は累進率なしの割増金額に応じて加給される。この加給金は手取り給与の三〇〜四〇%を占めている。

ソ連では労働賃金について、個人のうけとる個別賃金の外に、労働者にあたえられる恩給、医療施設、家族手当、休暇、クラブ、などを集団(社会)化賃金と称し、現在名目賃金の四〇%ぐらいに当っている。

面白いのは分俸手当、家族手当である。子供三人までは一人につき二〇〇ルーブルを手当として出し、四人になると分俸手当の六五〇ルーブルの外に家族手当が月四〇〇ルーブルずつつく、更に六人目になると一時金一七五〇ルーブルがつくというように、生めよ殖せよの方向がとられている。

ソ連の労働時間制は、現在では一般に八時間労働で、時間外労働は禁止されている。第六次五カ年計画内に七時間労働制にうつる事が発表され、現在でも一六〜一八才の青年労働者は、すべて六時間労働制に移り、土曜日と

タクシの料金は、キロと時間の二本建てらしく、その料金は日本の場合より高額のようだが、自家用車もかなり走っている。さて話がこままでくるとどうしても、労働者の賃金、あるいはノルマについて記さなければならぬ。ソ連の一般労働者の平均賃金は、八百から一千ルーブルである。賃金の最低は十六才三五〇ルーブルという、しかしこの最低で生計を樹てる者については、四〇〜五〇%のプレミアムがつくといった具合で、均等賃金制ではなく、差別賃金制を採用している。賃金の最高はアカデミー会員の一万五千ルーブルというクラスで、優れた学者や芸術家には、豊富な研究費を支出しているわけだ。労働者の場合は熟練、不熟練、重労働と軽労働、国民経済の重要部門(石油、石炭、冶金機械製作など)とそうでない部門との間には賃金の差別がつけられている。これは労働者が自分が受取る賃金に対して持つ関心を利用して、労働の質を高め、労働を必要部門へより多く、ふり向けるためである。重要な経済地区、北極圏に近い地区や沿海州、樺太などの遠隔地や未開地の企業や建設地の勤労者も高い賃金をうけとることになっている。

スタアリン・ゴルフコフ炭鉱での調査によると、二交替、実働六時間で働く採炭夫の賃金は月額、一、七〇〇〜三、五〇〇ルーブルだが、坑外労働者は九〇〇〜一、二〇〇ルーブルといったところだ。坑内夫は一台、七〜八千ルーブルで買える乗用車を所有していると聞いても不思議な話ではない。鉄道の機関乗務員の平均賃金は一、〇〇〇ルーブル、機関助手が七五〇ルーブル、教員は医者や官庁事務員より給料がよく、七〇〇〜二〇〇〇ルーブルが支給されている。

賃金の形体は出来高払、時間払、固定給払の三種で、工業労働者の七十五%以上が出来高払で企業の警備員、出勤退出記録員などが時間払で、デスクワークの職員が固定給払である。しかし労働者や職員が実際にうけとる賃金の額をきめるのは、基本賃金と労働ノルマ(標準作業量)である。

ノルマといえば過酷な労働を想像する響きをもって聞かせる。しかし、われわれが調べた工場労働者の実態は、ノルマ以下の労働者は一%にも及んでいない。ノルマを四倍も五倍も上回る作業を遂行する者が多く、ノルマが苦しいと述べている人はいないようだ。だからノルマは決して悲惨な厳しいものではない。ノルマを決定するのは工場の管理部と組

休日の前日は一般に六時間制となっている。年次有給休暇も職種によって分れており、最高四十八日から十二日までである。夏には黒海などの保養地や、別荘地に長期保養をする者も多い。社会保障の中で特に進んでいるのは医療保障で、総ての国民は無料で治療するのが原則だ。労働者が病欠欠動した場合、勤続三年未満の者は五〇%、八年未満が七〇%、十一年以上が九〇%保障される。養老年金も勤続年数によって異なるが、男六十才、女五十五才から支給され、六十才の男が、自分は現在一、二〇〇ルーブルもらっているといっている。さて労働者の税金はどういう具合に出されているか、それは所得税一本で、次表のよ

賃金労働者の税金

日給	算出方式	金額
260~300	5	150
301~400	11	300
401~500	18	400
501~700	26	500
701~1,000	46	700
1,000以上	82	1,000

を越える額の
6% 7% 8% 10% 12% 13%

(単位はルーブル)

このような各人の収入、支出を、家庭の主婦はどうやりくりしているだろうか。私の調べたモスクワ市役所の職員は、妻がある事務所で九八〇ルーブル、自分が一、二〇〇ルーブルのサラリーだ。父が年金月額一、二〇〇ルーブルの総収入から、食費六五〇〜七〇〇、衣類六〇〇〜七〇〇、住宅、光熱費一〇〇、その他、教養娯楽費といった支出である。

郷さんの奥さんが、彼女の二人の友達について当ってくれたが、モスクワ放送局、録音技師ワリヤさんは、主人と子供三人の家族である。熱光学の技師である主人が一、五〇〇ルーブル、彼女が一、〇〇〇ルーブルの収入で一カ月の必要生活費は大体二、〇〇〇ルーブルである、もっと節約できるが二、〇〇〇ルーブルでは少し足りないそうだ。

また化学工場に勤務しているペーロワさんは、主人が八八五ルーブル、彼女が八三三ルーブルで二人の子供と生活している。長男の学費は一年に三、七〇〇ルーブルかかるが、これを国家が全額保障してくれる。七つの子供は幼稚園費が年額三、三〇〇ルーブルかかるがこのうち一、五〇〇ルーブルを一家で支払い残額は組合で負担してくれるから十分黒字でやっつけける。郷さんの奥さんが最近、長男

を出生したときの経験によると、お産の時は住居区にある設備のよい産院へ入院した。食事衣料はそこで用意してくれるから、一切、家から仕度する必要はなかった。約八日間退院後、二カ月間は有給で休めた。(ソ連では産前産後休暇は十七週間で、その後八か月間は無給で休職できる)授乳期には毎日午後四時(定時は五時)で帰宅できた。彼女の場合は女中さんを一人おいて育児と家事をまわらっているが、どんな職場にも、ゆきとどいた育児施設があって、子供が出生したからといって共稼ぎができないことはない。郷さんは毎朝、子供のための牛乳四〇〇瓦、果汁(果汁に澱粉を混ぜたもの)二〇〇瓦、スリフキー(クリームの種類)一〇〇瓦、幼児用ヨーグルト六〇〇瓦を、全部で四ルーブルで買っているということだ。

ソ連の労働者は、どのように暮らしているか、私のノートはまだ充分これを記していない。しかし以上のようなきわめて大ざっぱな説明からも、彼らの明るい日々の生活ぶりが、ある程度想像していただけると思う。

再び作家同盟

を訪ねて

モスクワでは、前後三回、作家クラブで人々と話し合う機会を持つことができた。それは通訳者の吉沢君と面識の深い、「ツルード」の詩人、エカチエリナ・シエヴェローヴァさんの好意によるものだった。

スルコフ(作家同盟書記長)レオ・オシヤニン(詩人)イリーナ・リヴォヴァ(日本文学翻訳家)……など著名な人々をはじめモンゴールやブルガリアの作家など、このクラブでよく顔を合せた。この方面の勉強をしてきていたのだったなら、この千才一遇ともいべき機会を十分に生かすことができたものを、と悔まれてならなかった。

イリーナ・リヴォヴァ女史の日本語会話はすばらしい。今年四十二才、彼女がいままでソ連国民に紹介した日本文学は非常に数が多い。小林多喜二の「党生活者」宮本百合子の「峠州平野」高倉テルの「箱根用水」徳永直の近作「静かなる山々」といったプロレタリア文学の系統から、木下順二の「夕鶴」や、最近では石川達三の「風にそよぐ葦」な

どを翻訳している。慶応大学出の朝鮮出身作家で、日本では「切腹した参謀たちは生きてい」を出して知られているロマン・カム氏はいま下山総裁事件を題材にした推理小説を執筆中で、「ソ連のシャロック・ホームズ版」といったところですね。」と笑っていた。私が二度目に作家同盟を訪問したときにはちょうど、日本代表団にロシア語の通訳者として参加していた「ソ研一」(ソヴェト研究者協会)の会員である久野公夫、小沢政雄の両氏や、早大の学生代表が、日本のソ研本部から託された「日・ソ文学者の交流と両国作品の共同翻訳」などの提案について、作家同盟の回答をうけにきていたので、一緒に国際部長との会談に加わるようになった。

日本文芸家協会を

クラブの隣りのトルストイ像のある木造家はモスクワ作家同盟の本部になっていた。帝政時代の貴族の旧邸だったというこの建物は、白と黄色の色調のまことに感じの柔らかな二階建の建物で、近代的な建物にはさまって古風な素材さを保存されているといった感じだ。日・ソ文学者の文流についての会談と



どここの駅でもすごい歓迎だ

論議をかわすといったものでもない。物腰の非常に上品な同盟の国際部長から、すでに同盟側では日本のソ研の提案については賛同しその手始めとして「九月に日本の作家代表三名を、モスクワに招待する」ことを決定して日本のソ研本部あて発送するばかりにタイプされた回答文の写しを見せてくれるという早手まわしであった。この話の中で何か論議があったかといえ、国際部長が、

「日本の作家代表をだれにするかは、日本の作家の団体に決めて下さい。しかしその作家の団体は、私たちは日本文芸家協会にお願いしたいと思います。」と説明があったとき、同席の早大生Y君から、

「それは問題だね。新日本文学会の方がいいんじゃないか。」



アジア・アフリカ集いを終えて農博会場

とちょっと異論が出た。しかし小沢さんや私などは、このY君の説には同調できなかった。新日本文学会は日本の進歩的な作家の団体としては、立派な業績をあげている。このことについて何らの異論はない。だがいままこ

作家同盟が望んでいるのは、日本の文壇や作家の実態について、よく知りたいということであろう。だから「日本の作家代表」という先方の希望に応えるには、代表の人選は特定のジャンルの作家で占るべきではないだろう。その点、巾と深さの両面において、日本文芸家協会は適当な団体ではないか、という小沢



コーカサス美人とならんで

長身の五〇年輩の男だった。むこうの人に私たちを即座に日本人と見わけることではできない。いつもきまっていたづねられるのは、中国人か、インドネシア人か、あるいは朝鮮人かとする。この場合私は日本語の書籍をもっていたからすぐに見わけがついたわけだ。この長身の男は、私をゴリキリーの書棚の前に案内して、

「ゴリキリーは、自分の作品をその生涯で三十七ヶ国語に訳されている。しかし同志エレンブルグは、既に三十一ヶ国語に訳されて、世界に紹介され、一九〇の作品を発表している」

と、私の顔を、上からのぞきこむようにして手真似を入れて説明してくれた。私が多少の会話をこころみたら、さそ面白い話もできたのだらうがなにしろ頼みにする吉沢君はいないし、突然でもあるので、うまく応対の会話が出てこない。そのうちに彼はいうだけいうと、レストランの方に行ってしまった。その時、吉沢君が用談をおえてこの部屋にはいつてきた、

「杉山君、あの人がドウジンツェフなんだ、どうもそうらしいぞ。」
と、いつてくれたが、もうその時は彼の姿は見

さんの説得で学生のY君も、最後にはこれに同調してくれた。

「作家同盟が日本文芸家協会に、代表の人選を依頼することは、賢明な方法だと思えます。」

とお伝えしたところ、国際部長は柔和な顔をさらにほころばし、リヴェンパー女史は、わが意を得たようにうなづいて見せた。

ソ連における日本文学の研究熱は、最近とみに高まってきて、古典や現代文学に興味と期待をもっている人々はかなり多い。私たち日本代表団のお世話をしてくれるモスクワ大学や国際関係大学の日本語学部の学生たちの中には、万葉集を研究し、藤村や白秋の詩を愛好している青年もいる。しかしその彼らと話し合って意外な感じがするのは、例えばプロレタリア文学作品が、日本文壇において、どんな地位にあるかは、あまり理解していない。彼らの日本文学についての研究は、何か一方に偏っていて、ひどくムラがあるようだがこの点、私などが大きな口をきけたガラではないので、日本からやってくる作家代表によって、ソ連の学生や、日本文学研究者に、正しく日本の文芸作家の実態を紹介してもらいたいものだと思う。

えなかった。

ドウジンツェフの近況については、彼の問題作「パンのみにあらず」を山村房次氏とともに直接翻訳した久野公夫さんが、われわれ代表団の中におり、おそらく同氏がモスクワで話し合ったことであろうから、その方面のことは専門家の同氏にゆずりたい。

八月十四日、私はレニングラードを離れるとき、駅頭の立売所で若干の書籍を購入したが、その中にソ連共産党理論機関誌「コムニスト」No. 9があった。日本に帰ってきて母校の図書室にお土産として差し上げようとしたら、すでに学校の方には、東京のナウカからNo. 12の八月号が届いていた。私の土産を完全に月おくれにしてしまった「コムニスト」No. 12には、あのフルシチョフ第一書記の論文、「文学、芸術と人民の生活の結びつきのために」が発表されていた。

ドウジンツェフの「パンのみにあらず」は第二十回党大会の直後の、あの反スターリンのドラマチックなふんい気の中で発表され、しかも作品のなかでとりあげた個人主義や出世主義と結びついた官僚主義の大胆な批判は、戦後ソビエト文学界に異常な反響をよび起し、その反響は資本主義国のジャー

「パンのみにあらず」と

月おくれの「コムニスト」

この会談の終了後、リヴェンパー女史から土産にいただいた二葉亭四迷、樋口一葉、国木田独歩などのロシア語版や、作家同盟や外国出版刊行の図書の小脇にかかえて、私は隣の作家同盟クラブに行った。吉沢君がシェベローバー女史と用談中であつたので、その間、クラブの陳列書籍を見ていた。トルストイ、ゴリキリー、プーシキンなど文豪の肖像画が、等間隔に書棚の一番上にならんでいて、その間に新聞紙大の世界地図が貼られている。この地図は、上の肖像画の人物の著書が翻訳刊行された国をしめすもので、色彩のテーパーでいろいろの地点が肖像画の下部に扇形状に結ばれている。下の書棚にはその外国で翻訳された書籍の現本が陳列されているのであつて、私は記憶も新しいイリヤ・エレンブルグの肖像画の戸棚から、淡徳三郎訳の「パリ陥落」泉三太郎訳「雪どけ」（新潮社）などの日本版を手にしていったとき、
「タワリーシ、ヤボンスキー・ダー」
と後から肩をたたかれた。

ナリズムなどによって、さらに大きくセンセーショナルにおおられた。しかし、この国内外での賞讃と批判はハンガリー事件の発生をめぐる国際情勢のはげしい推移に影響されて急速に否定的な評価に変わってゆき、作者の誠実な意図はみとめられながらも、作品の思想的文学的欠陥にたいする集中的な批判が起つた。五十七年三月のモスクワ作家同盟大会では、作家たちはドウジンツェフの立場を支持したが、五月に開かれた全ソ連作家同盟大会では、ドウジンツェフ支持者たちは逆に沈黙戦術をとり、その結果は大会の発言としては幹部派の意見が強力におし出されたにもかかわらず、実際の会議の空気としてはこの幹部派の主張に対して反抗する空気がみなぎっていた。このことから、西欧側では「モスクワ作家の沈黙」としてこの事態を注目していた。フルシチョフの論文は、このモスクワの作家の沈黙的態度に対して共産党の文化的指導面では、はじめての総合的な公式見解を明かにしたものであり、複雑化している文学芸術の分野の思想斗争を、マルクス・レーニン主義の原則的な基礎のうえに総力を結集することを強調し、行過ぎた修正主義への警告を発したものである。この論文の中で、フル

シチョフは、ドウジーンツェフの「パンのみによるにあらず」を特に指摘して、「この作品には正しく、力強く書かれたページもあるが、全体の方向は根底から正しくない。読者には作者が欠陥を除去しようとする憂慮につらぬかれていて、欠陥をあげて喜んでいっているように思える。」この人たちは、文学、芸術の使命は欠陥をさがし出すこと、生活の否定面について、もっぱら語ることに、すべての肯定的なものについては、だまっておくことだと考えている。しかし、あらしのように発展する社会主義の現実にあつては、まさにこの肯定的なもの新しいもの、進歩的なもの、こそが主要である。批判をする場合、どのような立場から、何の名においてするかが問題である」

「一部の作家は生活を知らず、なくてはならぬ政治的経験を持たず、生活のなかの主要なもの、決定的なものを見分けてつかず、欠陥や誤りにしがみついている」……と、いまをときめくソ連共産党第一書記が、この一介の作家とその支持者に対して、かくもはっきりと「原則的な思想斗争を申し入れていく」のだ。

「コムニスト」誌に発表された論文は、八ようど正反対になっている。

ソ連の科学研究施設もまた革命以来、あらゆる面で拡充され、現在各種科学研究施設の総数は約二千、そこに働く者の数は約二十四万といわれる。そしてそれらの中心をなすのがソ連科学アカデミーである。科学アカデミーは科学発展計画の立案機関であり、五カ年計画の立案では大きな役割を果しており、アカデミー会員は、革命前の名譽職的なものと違い、ソ連科学の文字通り最高峰である。

二〇回党大会では、研究と実務活動の結びつきの弱さや、科学アカデミーの研究施設や研究者が、モスクワとレニングラードに集まっているのは不合理だと批判しているが、近く東部開発の重要性から、研究施設の分散を行う模様である。

科学の発展は研究費の豊富な裏付けが反映しており、国家予算の二・二パーセントを占め、学者の待遇は、助教授クラスで三〜四千ルーブル、教授ともなれば八千ルーブル、さらにアカデミー会員は一万五千ルーブルという大変高額の俸給を受け、優秀な発明や研究成果に対しては毎年レーニン賞その他の賞が授けられ、五万五千ルーブルの賞金も付けら

月二十八日付のプラウダ、文学新聞などにも転載され、ソ連各紙はその後、このフルシチョフ論文を歓迎する作家たちの発言をのせているようだが、いづれも党の優位をうたっている。だが、これまで作家攻撃に用いられた「修正主義」とか「ヒリリズム」のレッテルは一つも見当たらないし、編集長の解任などの「行政処分」が行われたことも聞かない。スターリンの時代ならば、一も二もなく粉砕されたであろう作家の抵抗精神に、新聞二ページにわたる論文をもって対決しようとするあたり逆に考えれば後退できない「雪どけ」があるのだろうか。

人工衛生を生む すぐれた科学教育

人工衛星「スプートニク」の打上げの成功は、西欧や日本人々にソ連科学のすぐれた力を、いやというほど見せつけてくれた。

もちろん私たちの訪ソ中には、まだスプートニクは地球を回ってはいなかったが、ICBMの方はとうに成功し、世界最初の原子力発電所や、TU一〇四ジェット旅客機は動い

れている。

さらにソ連科学の発展を見るには、大学生の九〇パーセントが奨学金によって育成された昨年度からは、初等から大学までいっさいの授業料が廃止されていることなども非常に大きな意味をもっている。

すし詰めより二部教育 ソ連の教育の現状

ソ連の十年制義務教育は、はじめの四年が初等課程で学級担任制、五年以上は中等課程で学科担任制となる。すべての生徒がこの課程の中では職業教育などはやらないで、基礎教育をみっちりうけ、十七才後においてはじめて職業か上級進学かの進路が分けられる。外国語の教育は五年にはじまって、六年間必修で（五年は週四時間、あとは三時間）英、独、仏の三カ国語のうちから一カ国語を必ず学ぶという仕組みになっている。

「各国の教師の集い」に加わって中等過程の教室を参観にいったら、生徒の方から「英語の話せる人はいませんか」というふうに問いかけてられた。「私はドイツ語です」「私は仏

ていた。これらはすべて「突如」として生れたのではなく数学や物理学などソ連科学の基礎的な面は、ロバチエフスキーやツイオルコフスキーなど十九世紀ロシアの時代からうけついで土台のうえに、革命後四十年の科学教育の成果の積み重ねが、この勝利を生んだものであろう。

四十年前、帝政ロシアの古いトビラが開かれた当時は、国民の七〇パーセントにおよぶ人々は、僅か三十文字のロシア文字を読み書きできなかった。それが一九三〇年、四年制義務教育がしかれて、その後七年制に延長され現在都市では十カ年義務教育制の実施がほぼ終って、六〇年までには農村を含む全国に及ぼされることになっている。実業学校や大学その他の高等諸学校は、革命前にくらべると百五から七百六十七に、その学生数は十三万七千人から二百一十万人に、実業学校生徒も五万四千人から二百一十万人にふえている。

また質的にみると、ソ連では「専門家の養成」は国民経済計画の一部をなしており、この二〜三年来、大学その他高等諸学校の卒業生中、じつに七十三パーセントまでが、物理化学、工学、医学、生物学などの、いわゆる

語です」と各自が学んでいる外国語の別に椅子をならべて、われわれ参観者の質問に答えてくれた。この国には数百の民族がいるのでそれぞれ言葉で授業をする学校もあるようだが、そんな学校の生徒は、自分たちの民族語のほかにソ連の標準語であるロシア語を学び、さらにそのうえ英、独、仏語のうち一カ国語を学ばなければならぬのだから、外国語がどんなに重要視されているかがわかる。

われわれの世話をしてくれるソ連の学生たちが、日本語の上手なもの、こんなところに起因しているだろう。日教組関係の私たちの仲間の話では、中等過程の二年生が、微積分などの高等数学をやっていたということだ。

ソ連教育のもっとも新しい動向をしめしているのはイントロナート（全寮制の学校）だ。一つの建物のなかに学校と寄宿舎、教員住宅があつて、生徒と教員の全部が集団生活をいとなむ十年制学校のことだ。生徒は土曜日の午後自分の家にかえり、日曜日の夕方掃除する。子どもを両親からきりはなすのではなく教師と両親と住民の三身一体の協力で、子ども環境を最善な状態におき、生活と学習と労働を一体とした教育を行うもので、昨年（五六年）できたばかりの制度で、現在はモス

クワに一五、全ッ連に三五〇で、孤児や、両親が労働に従事して、子どもの学習を見る時間の余裕のない家庭の子どもが、優先的に入学されているが、将来はソ連のすべての十年制学校をイントロナートにするのだという。

そのほか日本にその例のないのはベタゴジカル・インステイテュートと、呼ばれるものだ。モスクワ二十五区の各区ごとに一つづつある。この制度は若い教師はここで、年輩の教師の経験から教育技術を学び、また年輩の教師は学校出の若い教師から、新しい教育学の知識を学ぶという、教師の経験と知識の交流によって、その質的向上をはかるところである。

このようなことから見て、ソ連が教育優先の国であることに疑いはないが、その国で不思議なことに午前午後の二部教育がまだ残っている。モスクワやレニングラードのような大都市では、一年から四年までの初級学年は学校が足りないのだという。そうはいってもどの学校も広い教室に三十人ばかりが、ゆったりとはいっている。机や椅子などを持ちこめば五十人や六十人は詰めこめる。しかしそれをやらずに二部教育をしてまで適正規模を

くずさないのは、日本の教育行政と根本的にちがうところだ。ちがうといえは学校という建物についての考え方がちがう。建物をつくって、椅子と机をならべ、子どもと教師をいれればそれで学校だというのはケタがちがいで、教室も廊下も図書室もホールも食堂も、調度や装飾はあたたくて家庭的で、全体が大きな邸宅といった感じである。

人工衛星に代表されるソ連科学界の進展はこの基礎教育の充実と切り離して考えることはできない。

ソホーズを訪ねて

ハンストの英雄

夏だというのに肌寒い朝だった。私たち十四名の日本代表団員を乗せたバスは、モスクワ郊外のソホーズ（国营農場）にむかっていた。車が街をすぎ、家数がまばらになるにつれて、ロシア特有の丸太造りの家屋が次第にふえてきた。車は延々とつづくアスファルトの道を、時速五〇Kではしっていくが、車窓にうつる農場はあまりに広々しているためにゆっくりとその風景を移してゆく。白い野菊

のような花や、桃色の花が沿道にどこまでも咲きつづき、信濃の高原をゆくような美しさだ。同席の外国代表は、いかにも農村出の若者たちらしく、高い鼻と、おでこを車のガラス窓にくっつけるようにしながら、この車窓の風景を觀賞していた。しかし車が白樺の林にさしかかったころ、散雨が窓ガラスをうって、せつかくの風景も、しばらくその視野をたたれてしまった。

二時間も走ったころ、車は舗装道路から脇道にはいった。雨あがりの道はトラックのわだちで深くほぐれていて、車の上下振動は激しい。農村道となれば、日本と同じことだ。白樺やエゾ松、ヒバの林を通りぬけると、ソホーズの入口とおぼしい建物のあたりに、花束をもったたくさんの人々が、私たちを出迎えてくれた。ソホーズの中央とおぼしい集会所の前で停車するや、さあ早速、歓迎陣の殺到だ。その人ごみの中を、背の高い、やせ型の年輩者がかきわけてきて、私たちを集会所の中に案内してくれた。グレーブ・ニコラヴィチさんというこのソホーズの企業長であった。ここで私たちは彼から、ソホーズの沿革、組織の概要、収穫状況などを説明してもらった。

このソホーズは、レスニエ・ボルヤース・ソホーズ（森に囲まれた野原）と呼ばれ、革命後間もない一九一九年、レーニンが家族とともにこの地方に住みこんで、直接ソホーズ建設の指導に当たったという、いわれの深いソホーズである。レーニンが始めたころは面積四〇ヘクタール（約四十町歩）であったのが

その後の年々の拡張で、今では一、〇四〇ヘクタール（耕作面積は八〇〇ヘクタール）をしめるようになったという。しかしこのソホーズは、特にロシア純血種のホルモゴール種の乳牛の飼育と搾乳が専門で、その他の家畜や農作物については副業といったところである。七七〇頭の家畜のうちで二二〇頭が乳牛を搾乳し、今年目標はこれを五、二〇〇リットルまで高めることだ。また五カ年計画で与えられた任務は、乳牛を三〇〇頭にふやし一頭につき五、四〇〇リットルの乳を生産することだそうだ。

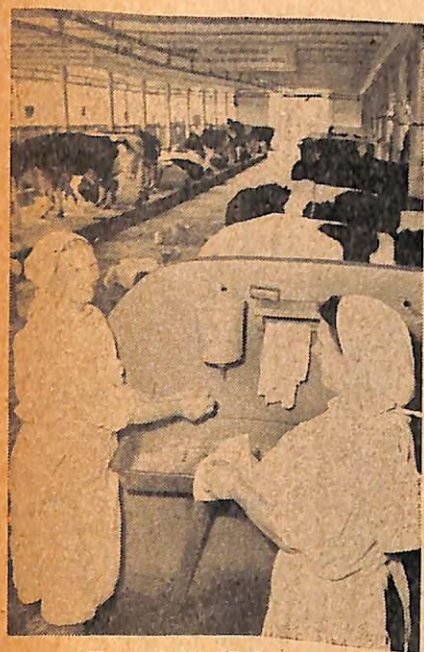
企業長は図面をひろげ、数字をあげて生産目標の達成への道を説明する。その隣りには胸に勲章をつけた婦人が立っていて、彼の説明を補足するが、あの映画、「女狙撃兵、マリユートカ」の主人公の晩年はかくあるかし

を思わせるような、がっちりした男勝りのタイプのおばさんで、私たちの質問には腕をふるって「五カ年計画の目標達成は大丈夫です」と演説調で答えてくれた。

払うこともある。その他に、畜産搾乳量の生産性向上のための賞金や表彰制度がある。マリユートカおばさんの勲章も、こうした国家による表彰制度によってうけたものだろう。

ソホーズの内部組織は、家畜班、野菜班、機械班、建築班、経理班の五つの部門に別れていて、ここに働いている労働者は三〇〇名くらいであるが、その半数は女性で、彼女たちは主に家畜班や経理班で多く勤務している。

私たちはこのおばさんの案内で、家畜舎、野菜園、果樹園などを見学した。私と同行の日本の代表たちは、日本農民組合や全農林職組に所属する豊畜産関係者がほとんどで、牛を見て豚を見ても「すごいな」「なーにたいしたことはないさ」など、多にその専門知識を斗わせて、なかなかうるさい。しかし門外漢の私には、さっぱり、何がどうなのかわからない。しかし



明るく清潔な畜舎

二百余頭の乳牛がすわりとならんでいる畜舎の明るさと清潔さには目をひかれる。コンクリートのたたきは自動式に水が流れるようになっていて、あまり臭くはない。白いエプロン姿の女たちが、牛の四つの乳首に、乳を搾

ると、牛はしだいに眼をはそくしはじめ、やがて天井にとりつけてあるガラスの容器に一杯になると、これを大きな鉄管にかけて隣の煮沸場へ流しこむ。そこからまた冷却されて大きな容器につめこまれていく。最近では「乳房からピン詰めまで」ほとんど人手を触れさせない施設もでき上っているそうだ。



ウクライナ人のカサツクダンス

乳牛の飼料には豆類とカラス麦、小麦、マイ麦の苗（日本の青刈に近い）キャベツなどを与えているが、これは季節によっていろいろかわるようだ。それから豚舎、それから鶏舎、それから牛や豚の飼料をつくっている工場などをみた。自動的な水替機、えさを引張る機械や、その引張り上げられたものを、かきまぜを機械など、てんで素人の私には批評もできない施設ばかりだが、ぜんたいがたいへん機械化され労力がはぶかれてるように感じ。だ

テレビに写される

われわれが野菜畑に案内されたとき通訳の一人がニュース・カメラマンをつれて私を追ってきた。婦人記者が私に、「貴方は東京でハンガー・ストライキをやりましたか」とたづねた。東京での旅券獲得斗争時、国会前でハンストを行った者が、この中にいることを聞いたので、とくにインタビュをしたいというわけである。たまたまこのソホー見学者の中には、私よりほかにもう一人、ハンストに参加した日農青年部の中川良一君がいたので、私と同君の二人は、食糧倉庫前の

広場につれていかれて、当時の模様をいろいろたづねられた。たかだか三十五時間ほど、国会前にテントを張って座っていたというだけのことであるので、このインタビュにはすっかりテレビでしまいソホーズの子どもや娘さんたちの人だかりの中で、二人で頭をかいていたら、同行のニュース・カメラマンからソホーズの企業長ニコラヴィチさんと何んでもいいから話し合っているポーズをとってくれと注文をうけた。まあどうにでもなれと、「モシモシ亀よ亀さんよ」と企業長を差しはさんで二人で勝手なことをいって口を動かしていたら、企業長も心得たものでカメラのレンズにむかって、肩をつぼめ両手をあげたり、頭をかしたり、なかなかの演技ぶりだ見物人のだれかから「オーチン、ハラショー」と声があったので、どっとみんなで大笑い。ソホーズを訪れたハンストの英雄たち、果してどんな姿で、ソ連のテレビにお目見えしたことだろうか……。

ツものるように小ツブなもので、日本の「国光」や「印度リンゴ」にくらべたら、お世辞にもうまいといえたものではない。しかし、この小ツブなリンゴが、彼らの毎日の食事に欠かさないミチューリン農法によって育てあげられたものである。

すすめる娘もいた。野ブドーカグミのようなすっぱい実をすすめる子どももいた。果樹園ではリンゴをいただいた。しかしいづれも日本の八百屋や果実屋では、とても売物にならないようなものではない。温室栽培によるその胡瓜は、細くて小さく、青いリンゴは掌に四

最後に案内されたのは、ソホーズの人々の家屋である。そこは事務所の西南五〇〇メートルばかり離れたところにあり、部落の隣り合せの森の中には小意気な簡易住宅が五〜六軒と子どもの遊び場などが設けられて都会の労働者の別荘地となっていた。ソホーズの農民の住宅の方は、平凡な白ベンキを塗った木造家屋で、四、五軒が等間隔でならんで建てられてある。できてまだそれほど経っていないらしく、後の方には古い丸太造りの家屋が半壊のまま、彼らの昔の生活を物語るように残っているところもあった。

部落の人口は約七〇〇名、世帯数は一七〇で、成年の大部分は、このソホーズで働いているが、一部にはモスユーの工場に行っている者もいる。

写真をうつしに道路わきの家を訪問したらその家の夫婦は心よく私を家の中に迎え入れて、お茶をいれてくれた。三坪ほどの応接間六坪ほどの寝室、その向い側は廊下を境にし

て台所と家族の居所間だ。もちろん農家の台所だからガスや電気の台所用品は見当たらないが白いレースのカーテンで飾られた四坪ほどの居間では、老婆が、長椅子のクッションにもたれて、なにかせつせと手編の棒を動かしていた。コップや皿などを戸棚に飾るのは、外国人の風習であろうがその隣りに、テレビがオペラを写していた。このテレビの受像面は、往復はがきを拵げたくらいの小さなものであるが、老婆はこれを、誇らしげに指さして見せた。

モスクワでもシベリヤでも、テレビの普及は非常なものだが、こうした実用型で国民に普及をしようとしたものである。老婆は壁に貼ってある孫の写真を見ながら、「大学が休みになって帰ってきたら、家族そろって一カ月ほど、サナトリウム（保養所）へ行く」と、現在の生活にいかにも満足そうな話しぶりだった。私がこの家で一寸、不思議に感じたのは、日本の家庭に見るようなダンスや鏡台、針箱、人形ケースといったような、大小とりどりの家財道具がまるで見当たらないことだ。衣服類の一切は大型の洋服ダンスが一つで間に合っているのだろうが、なんとなくさっぱりし過ぎている。ほかの家を訪問した私



冬宮のぞむ青銅の騎士

たちの仲間も、みなこのことについて不思議に感じたようだ。過去における農民の生活が非常に悪く、消費面は極度にきりつめられていたためか、あるいは生活の風習が、もともと簡素であるためか……。

ソホーズの部落には、一棟に四家族も入っている家もあった。日本の、だだつ広い農家を見慣れている眠からは、このソホーズの家の家もけっして大きい家とはいえないが、彼等の営んでいる生活は合理的である。たとえば娯楽はクラブで、勉強は技術会館で、スポーツは運動場で、農具はソホーズの農具場に国家の手で充されている。このような生活では、各人の家が日本のように広い客間も、納屋も、畜舎も不用である。子どもの養育だって国家が一部を負担し、病気の場合は老後はどうなるか、などという心配はいらないのだから、ベビードダンスがなくとも、人形ケイスがなくたって、そこには日本人や、西欧の人々の考えをこえた新しい生活の様式があるのではないだろうか。

見学を終えた午後二時ごろから、ソホーズのクラブで歓迎会がひらかれた。レーニンやブルガーニンなど指導者達の大きな肖像画のならんだ部屋に、ところせまきまで飲物や料

理がならんでいた。ポーランドと中国の代表も来ていた。企業長は私たちを前に、

「このソホーズのすべてが皆さんの気に入ったわけではないかもしれない。それぞれ国民は、それぞれ好きな生活様式をもって入る。しかし、平和の事業をつよめ、世界のすべての国民と仲良くくらそうという点は、私たちみんなが一致している。(さかんな拍手) 私たちは話す言葉は違いますが、それは私たちが友人になることを、さまたげていません。いまや平和と友情は、すべての集会の合言葉となつています。各国の若い友たちの永久の友情のために乾杯しましょう。」

とむすんで、杯をとった。酒はグルジョアのブドー酒と六〇度のウオッカ、さかなは塩鮭のナマにロシア人が珍重するキャビア(鰵の卵)だ。乾杯が激しくなるにつれ、誰か歌うともなくロシアの歌、ポーランドの歌、中国の歌、その他各国のいろいろな歌声がこり、私も椅子のうえにつつ立って「城ヶ島の雨」を披露におよんだが、だれかが私の肢をささえようとしてくれた。しかし日ごろの訓練はこれしきの乾杯で、足もとがどうとという心配はいらない。食事がおわり広場に出て、部落の青年男女と夕方まで早いテンポの

ダンスを楽しんだので、おかげで帰りのバスでは、皆ぐっすりとなり、モスクワのホテルまで寝ていってしまった。

クレムリンとケセラセラ

モスクワにやってくるまで、ジャズがえらい人気だったということはちよつと意外だった。東京でソヴエト映画「すべては五分で」を見てきた者は、それほどでもなかったようだが、私などは、はじめのころ、集會場でジャズをやっているのは西欧の代表者たちかと思つていた。クレムリン宮殿での夜会に招待をうけたときは、これは「夜会服でもない」と恥をかくぞ」などとおどかされ、事実、われわれの仲間たちは、ベンチンがないので、日本から持つていったライター油で、上着のシミをこすつて出かけたくらいだが、行つてみれば広い宮庭に一ぱいの青年男女が、「ベサメーチョ」や「マンボ・イタリアーノ」を夜中まで踊りふけているといった光景だ。モスクワ河をはさんでの「水の祭り」の夜などはデキシerlandや、スイングの新・旧スタイルのバンドから、タンゴやマンボのバンドなど、三千いくつをかぞえるほどの軽音楽団が、遊覧船の甲板や、河畔の広場に出演し

ていて、みんな夢中で踊っていた。「ケセラセラ」は、いま一番の流行で、演奏のたびに熱狂的な拍手がわく。モスクワ娘はまだ、ロツクン・ロールは知らないようだが、これも流行にはそう才月を必要としないだろう。こんな場所には日本という「太陽族」とおぼしい若者の姿もチラホラ見うけられる。アメリカ映画は殆んど入ってきていないというのにジャズの流行はえらいものだ。

さて「太陽族」まで来たついでに、「夜の女」と「ユジキ」のことについてふれてみよう。現地の日本人記者の諸君は、「モスクワの『夜の女』は、春を売ったりはしないよ。多数不特定の男に提供する女はいるがね。」と笑っていた。働く気さえあれば、くらしをゆける国では、売春婦というものは、あつてもその数は非常に少くユジキの場合は、「働かないでユジキをする自由はある」といったところが事実のようだ。

車・人・有料便所

日本では歩行者はいつも自動車に、おどされてる。しかしソ連では歩行者が徹底的に優先で、ゴーストツップの信号が赤でも、人は

ゆう然と歩いてゆくの、青信号の自動車が止つているといふこともある。モスクワの道路は思いきり広いゆえに、自転車やスクーターはあまり走っていない。自動車の時速は制限がないようだが、交通事故は非常に少なく、なんでも世界の大国の主都では一番だということだ。警笛の使用は特別な場合のほかは禁



レニングラードのスターリン工場の工員たち

止され、やかましい軌道電車は、順次、トロリーバスに交替してゆくという気のくばり方は、まったくくらやましい。「J-S」とか「J-M」という型の車が高級車で、四〇年のキャデラックに似た「J-L」というのが、新車である。大衆車には五五年のプリマスに似た「ボルガ」とか「ナッシュ型の「モスクウイチ」などの小型が二万から三万ルーブルで売り出されている。もちろん街には、こんな車ばかり走っているわけではない。軍用トラックやジープの改造車も、さかんに国防色の車体をガタつかせており、周辺のユルホーズからは農作物をつんだ牛車もやってくる。

自動車がかわつたところは、散水車のようなタンクをつけたビールの立売り車や、大きなタワシをくつつけて道路を朝、晩走っている掃除車だ。移動便所もおもしろい。なにか屋外の集會のあるところには、この移動便所がいくつとなく牽引されていくから、立小便などの心配はない。人間の集りのあるところ排せつ行為ありだから、日本でも真似たらよからう、もつとも、この移動便所のなかには小便の場合無料でも、大便の使用については三〇カペイクをとられる(但し手拭と紙を入

口で渡してくれる。』というのものもある。

ダスピダーニア

モスクワ

十五日間にわたるフェスティバルの行事もまたたく間におわってしまった。八月十一日



レンングラードの街で

おわってしまう。

道路は直線的できれいだ。街の建物はクラシックなのが多く、しっとりとした感じだ。だがよく見ればその建物のバラ色のペンキの下には、大小、無数の弾こんが発見される。独ソ戦においてこの街は、九百日間もドイツ軍に包囲され、たえ間なき砲撃をうけて世界と祖国から孤立してしまった。しかし、ソヴェト国民にとって第二の都市として愛着され、ナポレオンの侵入をも許さなかったこの街の市民は、ネヅミを喰い、柱を削ってスライプにしてがんばったのだ。街で見うける義足や義肢の人々はこの戦いで傷ついた人々であらう。

鉄道職員クラブで一休みした私たちは、早速、有名な冬宮のエルミタージュ博物館を見学した。絵図、彫刻をはじめ、革命の初弾が炸裂した「孔雀石の間」も見た。国賓でなければ見られないという金銀の財宝を陳列された部屋も見た。これらはいづれも戦争中は安全な場所に置かれ、戦火が終息するや改めて元通に配列されたもので、豊富なそのコレクションは、ルーヴルにつぐ。しかしこの広大な博物館を、僅か二時間の駆足状態で見まわらねばならなかったのは、なんととても情

中央スタジアムでの閉会式があつて、その翌日の午後にはもう旅程の最終地であるレンングラードにむかつて私達はモスクワをはなれねばならなかった。

はじめ、われわれ日本代表団は、モンゴール政府から二〇名にかぎって同国に招待をうけていた。また中国政府はわれわれの要望にそつて、五〇名程度の日本代表団員が中国を訪問することをうけつけてくれた。しかしせっかくなのでこの招待も、香港、羽田間の航空旅費の捻出と、人選をどうするかでなかなか相談がまとまらず、ついに全員、レンングラード訪問を最後に、再びシベリヤ経由で日本に帰ることになった。数年前、日本から中国に潜入し、そこからフアステイバルに参加してきた産別の小倉君は、ただ一人再び中国へ戻る事になった。また国際実行委員の土方与平君は、こちらにとどまって、世界民主青年団関係の仕事をつづけていくことになった。両君の健康と再会を約し、見送りの人々に「ダスピダーニア(さようなら)」をさげんでモスクワを後にした。

☆ ☆ ☆

けないことだった。モスクワが今日のソ連の政治の中心なら、十六の博物館、総合大学が一つ、数々の学校と芸術家、作家、学者のサークルを持つレンングラードは、ソ連の芸術

革命の砲口

レンングラード

ペテロ・ドヴオレ

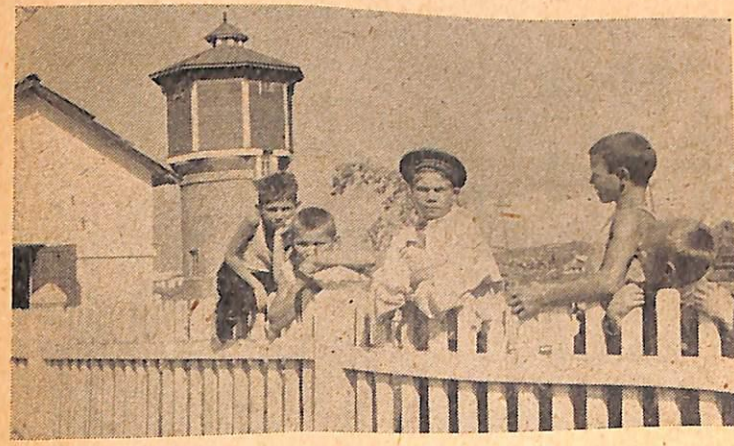
レンングラードは水の街だ。フィンランド湾にそぐネヴァ河の下流にいだかれ、どこを見ても水につきあたる。河中いっぱい流れているその水は、この街の荘重さを代表しているようだ。多くの革命の士を幽閉したセントボウル要塞の高い金色の塔や、白地に水色を配したような旧帝の冬宮が、その美しい影を水にうつし、その冬宮に革命の第一弾を放った巡洋艦オーロラ号も、この河岸につながれていて艦首の大砲はいまでも砲口を冬宮にむけている。

満洲にいて、箱根や奈良に遊んだことのあるという通訳のおばさんは、「あれがビュートル大帝の像、そのむこうの建物が聖イザック伽藍、そのこちら側が……」そこでレーニンがこうした、キエフがどうしたと、ペラペラ説明してくれるが、車窓の光景が移りかわりが早いので、いわれのふかい建物や銅像が随所にあるので、どの説明も中途はんばに

文化の中心地だといえよう。

翌朝、私たちはペテロ・ドヴオレを訪ねたビョートル大帝の夏の別荘で街から二〇キロも離れたところにある。対岸に、かすかにフィンランドをのぞむこの別荘は、十八世紀建築の珠玉だといわれ、かつては世界の旅行者が集まってきたところだったが、ナチスの軍隊は退却の腹立ちまぎれに、いたるところに入念にダイナマイトをしかけて木々葉微塵にぶとばし、更に残がいかに石油をふりかけて燃してしまった。戦後レンングラードの市会にはペテロ・ドヴオレを、昔のありのままの姿に復旧することを計画し、大小いくつもの噴水を復旧した。再建中の宮殿前には、そこから海にいたるまでフランス産の大理石の美しい大水盤を次々と滝をなしながら降りてくる壮大な水の階段が、昔の姿をとりもどしていた。野蠻な兵隊の侵入する前に埋めることのできた黄金色のブロンズの像も、元の位置に立てられて、千変万化の無数の水玉をうけて輝いていた。

ペテロ・ドヴオレからレンングラード郊外の重工業地帯にバスを進めるその沿道は、ドイツ軍との最も激しい死斗がくりかえされたところである。ドイツ軍の塹壕はこの周辺に



シベリヤのある駅で

掘られ、彼等の戦車はしばしば工場地帯の一部にも進出したという。

独・ソ両軍の血の染みこんだこの土壌にはいま、名の知らない白い草花が咲きみだれている。

ミール(平和)に

全力を挙げて

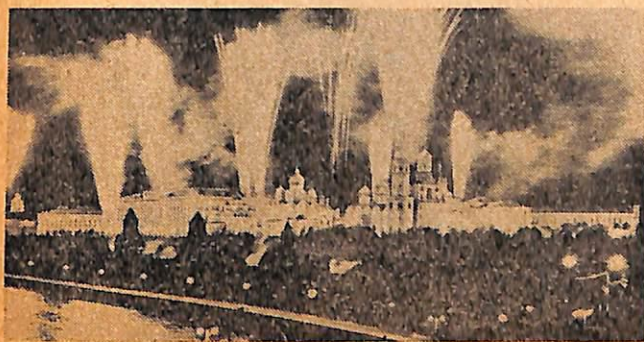
来る時飛行機から見たシベリアは、文字通り原野の広がり、地平線から地平線まで平坦な原と湖と川の組合せだったが、汽車で走ってみると大分趣きが違う。われわれはしばしば森や川のはかに相当高い山にもぶつかると。従ってところどころには、かなり長いトンネルもある。レニングラードからナホトカまで、一万三千キロの行程を十二日間で走ってきたわけだが、来る時は初夏の色どりに燃えていたシベリアの山野には、もうどこからか秋風がしのび、くれるに早い大陸の秋の姿を感じさせていた。しかし、来る時と変らず私達の心をとらえたものがある。それは鉄道の沿線百いくつかの駅々でうけた、あの「ミール・ミール(平和)」を叫び、花東と人垣で私たちを取りかこむ歓迎の人、明るくた

くましいその表情だった。

世界の人々は理くつなしに平和を愛し、戦争を嫌悪する。とくに長い間の戦争による疲弊のどん底にあえいできた民衆にとつては、平和こそ最大の願いである。革命後四十年、そのうち内乱と対独戦争の約十年、さきの大戦では人口の十人に一人に近い割合をしめる千七百万の死者を出し、戦争の惨烈さの経験は、世界にその例を見ない。引継ぐ戦後の復興作業に約十年、このように苦しい生活をなめてきたソ連の民衆が叫ぶ「平和」の声は一片の口頭禪やお題目ではなく、全く民衆の本心からの願いであらう。

民衆が平和を欲するその心にまちがいが無いとしたならば、ソ連国家の「世界に平和を」の政策は、永久の真の世界平和を望んだものでとうけとつてよいだろうか。しかしこの課題に結論を出すには、私のあわただしい旅の見聞記では不可能だ。旅行者の印象は、季節やそのときの天候によってさえ違ってくるあわただしい旅行者の印象は、いつもこうした危険をふくんでいる。しかしこのことだけははっきりいえる。それはシベリアに秋風が吹こうが、モスクワが氷雪にとざされようが季節や天候の変動にかわりなく、われわれが

見てきたこの国は、世界が平和であり、その平和な状態が長ければ長いほど、ICBMやスパートニクから、やがて洋服や靴の消費物資にいたる全体的な国力で、戦わずして、資本主義国に追いつき追いこすことのできる自信をもっているということだ。(おわり)



クレムリン宮殿のお別れの花火

あとがき

私がソヴェトにいったのは、一九五七年の七月であった。ハバロフスクから乗った飛行機の中で書きはじめた郷里への手紙は、四十日の旅程をおえて日本にかえってくるまで、七回ほどにわけて中部日本新聞の駿遠版に、紀行文として載っていた。帰国の後、引きつづいて各地に報告の活動をつづける予定であったが、なにかと仕事に追われてしまったために充分にこのことを果せなかった。

なにしろ、生れてはじめての海外旅行で、しかもその国は社会主義の国ソヴェト連邦である。さかんであったモスクワの平和友好祭はいうまでもなく、見るもの聞くもの興味のつきない毎日で、メモしたノートは五冊にもなってしまった。そこで、これらのノートを整理し、職場の機関紙などに発表した報告や紀行文をまとめて、パンフレットとして私の足りない報告活動の一端を果そうと考えたが、いろいろな事情から、組んだ活字も、ほこりの積むのにまかせてしまった。

だから今日、こうして読者にまみえるまでには二カ年を経過している訳である。この間には人工衛星「スプートニク」の打上げや、ブルガーニン首相の更迭、核実験中止の声明やバスターナク問題など、ソ連の政治、文化をめぐっての画期的な飛躍や変化をしめす出来事が、あいついでおこっている。したがって、私のこのパンフレットも、そんな複雑な波紋や胎動と無縁ではない。私とその瞬間々々に感じたこと、発表したことを書き改めずに、そのまま、まとめたものであるから、全体的な文脈の不統一や、時期的ズレは、このような事情を参酌して寛容を願いたい。

二年ごとに開かれる世界青年学生平和友好祭は、こんどはオーストリアの首都、ウィーンで開かれる。このため日本の各地でいろいろな行事が計画され、代表団の編成も進められている。今年の祭典はおそらく、あのモスクワ祭典にまさる盛況をみることだろう。つたないパンフレットではあるが、この私の赤げつと記が、モスクワ友好祭の思い出を伝え、世界青年の平和と友情を高めるこんごの活動に何かの参考となるならば幸せである。

一九五九年七月一日

杉山金夫

静岡県職員組合文教部長
日ソ協会々員 元自治労青対部長

ウラルのぐみの木

一、川面静かに歌流れ
 夕べの道をひとりゆけば
 遠く走る汽車の窓光る
 若者の待つぐみはゆれる
 オイ捲毛のぐみよ白い花よ
 オイぐみよ何故にうなだれる

二、川面に夕霧たちそめて
 家路を急ぐ工場のひと
 風にゆらくぐみの葉かけ
 若者二人われを待つ
 (以下同じ繰返し)

三、鶴のうたに秋は去り
 霜は大地を白くつつむ
 二人の若者今日もまた
 ぐみの葉かけをわれとゆく
 あおぐみよぐみよ白い花よ
 告げよわれにいとし人

一、ふるさとのこえがきこえる
 自由の大地から
 なによりもわれらしたう
 なつかしソビエトの地
 世界にたぐいなきくに
 うるわし明るき国
 われらが母なるロシア
 子供らはそたちゆく

二、とおくふるさとはなれても
 いつも夢にえがく
 あかき星の下にねむる
 わが山河広き野辺
 (以下繰返し)

三、エルベのほとりでうたわん
 広きロシアのころ
 おおいなる祖国のまえに
 ファシストはかげもなし
 (以下繰返し)

エ ル ベ 河

竹下八重子 作詞
 荒木 栄 作曲

手



ふとい手 ほそい手 ひやけの手と手
 みんな いきてる - わしらの 手
 あ め に は あ ら れ て も
 か ぜ に は お び え て も
 た っ か い ぬ い て き た み ん な の 手 と 手

二、ふとい手ほそいてひやけの手
 いろけはないがわしらの手
 夜には針仕事子供達の服ぬえば
 勇気がわいてくるみんなの手と手

三、ふとい手ほそい手
 ひやけの手と手
 すじのはいつたはたらく手
 ザル持チャ血がかよう
 シヤベルに力こめて
 あすのしあわせ
 かちとる手と手

エンヤコラ ドッコイシヨノ
 エンヤコラ、ドッコイシヨノ

東京の朝の歌

作曲 プランテル
訳詞 関 鑑子

ひがしのそらはあかくはとて
 1 ちのめざめししるはじれる
 1 どにかぜはそよみあさのあいつは
 くらあさのうたが
 さやかにひびく1 - 2 - 3 -
 あさひにかがやくどろろ - - ひかそくしのみ
 1 にみどりにあうこころはわかれ
 むやこあけゆくど - 3 -

一、東の空は赤く映えて
 街の目ざめ見まもる
 ねむれる窓に風はそよぎ
 朝のあじさつおくる
 朝のうたが
 さやかにひびくよ
 東京朝日に輝く東京
 光る雲の波間に
 みどりにあう木立
 心うばわれる都
 東京朝日に輝く東京
 光る雲の波間に
 みどりにあう木立
 明けゆく東京

二、色あさやかに花はぬれて
 すみわたる空に映え
 夜明けのつばめ
 酔くとびかう
 街の広場のめざめ
 朝のうたよ
 めざめのさわめきよ
 東京朝日に輝く東京
 明かるい子供のごえ
 乙女笑顔やさし
 めざめのうたさえひびく
 東京朝日に輝く東京
 光る雲の波間に
 みどりにあう木立
 明けゆく東京

世界の青春

一、進め我等若者世界の子等よ娘よ
 心あわせ新しい世界つくるため
 うたえ我等若者かず知れない兄弟よ
 旗をかかげ呼びかけひびかせつつ
 進む我等のうた世界の青春
 団結のうたこえは力にあふれて
 高くひびきわたたりたえるときもなし
 聞く者歌う者友情をかためつつ
 遠く広めつつけよ我等の歌声を
 進め我等若者世界の子等よ娘よ
 心あわせ新しい世界つくるため
 うたえ我等若者かず知れない兄弟よ
 旗をかかげ呼びかけひびかせつつ
 進む我等のうた世界の青春

二、自由と正義のため立上るちから
 けがれしいつわりもやがてきえさらん
 こころ火ともやして若き力もて
 幸あふる世界を我等闘かい取らん
 進め我等若者世界の子等よ娘よ
 心あわせ新しい世界つくるため
 うたえ我等若者かず知れない兄弟よ
 旗をかかげ呼びかけひびかせつつ
 進む我等のうた世界の青春

全世界民主青年歌

一、我等青年平和と幸求め
 誓いは固く我等戦いぬく
 山川異なる世界の青年
 腕をとり隊伍くみ声高らかに
 いざ共に歌え歌平和のちかい
 はばむ者にはこたえん高き歌声
 ああ青年のこの熱情はけせない
 平和を愛する熱情(平和々々)
 ちかいはかたい

二、戦いのさなかに倒れた友
 流された血で我等は結ばれた
 正義を愛する世界の青年
 明るいあしたを戦いとろう
 (以下繰返し)

三、我等のちかいは今日も又あらた
 聖なる旗を高くかかげて立つ
 平和にいとむ力をくだけ
 正義をまもって我等は進む
 (以下繰返し)

声 高 く

築城田二 作詞
芥川也寸志 作曲

Vivo (♩=104-112)

The musical score consists of three systems of vocal lines and one system of piano accompaniment. The vocal lines are in treble clef with a key signature of one sharp (F#). The piano accompaniment is in bass clef with the same key signature. The lyrics are written in Japanese characters below the notes. The score includes dynamic markings such as *non fiato* and *Piu ff*, and performance instructions like *3*, *1. 2.*, and *3A*. The lyrics are:

 こ え た か く あ か り い た は う の し た に う た

 に た く し て う み べ を へ だ て た 人 び と に よ び か

 を く ん で ひ と り で も か ず おー おー く き ず

 おうー う た おうー せ こ の ね が いー ほん す い ば く の は

 け よ う よ び か け よ うー せ こ の ね が いー せ ー 武 か ー 一 の へ

 こー き せ こ の ね が いー

 禁 止 を ほん す い ば く の き ん し を 2. う た

 ん た い を か く 武 装 一 の は ん た い を 3. う で

 い わ せ ー か ー い の へ い わ

 を ー へ (い) わ せ ー

一、声高く

明るい太陽の下に

歌おう

祖国の希望

原水爆の禁止を

二、歌にたくして

海へをへだてた人々に

呼びかけよう

祖国の希望

核武装の反対を

三、腕を組んで

一人でも数多く

きすこう

祖国の希望

世界の平和を

発行者 第七回世界青年学生平和友好祭
静岡県実行委員会

委員長 岡村一之
文書部長 杉山金夫

印刷所 株式会社 八千代印刷所
発行所 第七回世界青年学生平和友好祭
静岡県実行委員会

筆者 静岡県職員組合